



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



室蘭工業大学研究報告. 文科編 第43号 全1冊

メタデータ	言語: eng 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2800

室 蘭 工 業 大 学

研 究 報 告

文 科 編

第 4 3 号

平成 5 年 1 1 月

MEMOIRS

OF

THE MURORAN INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Cultural Science

NO.43

Nov., 1993

MURORAN HOKKAIDO

JAPAN

Editing Committee

K. Honda	Prof.	<i>Chief Librarian</i>
M. Irie	Asst. Prof.	<i>Civil Engineering and Architectare</i>
S. Hayashi	Prof.	<i>Mechanical System Engineering</i>
Y. Suzuki	Asst. Prof.	<i>Computer Science and Systems Engineering</i>
T. Sakaguchi	Asst. Prof.	<i>Electrical and Electronic Engineering</i>
T. Momono	Asst. Prof.	<i>Materials Science and Engineering</i>
S. Kikuchi	Asst. Prof.	<i>Applied Chemistry</i>
T.Yamaguchi	Asst. Prof.	<i>Common Subject</i>

All communications regarding the memoirs should be addressed to the chairman of the committee.

These publications are issued at irregular intervals.They consist of two parts.Science and Engineering and Cultural Science.

室蘭工業大学研究報告 第 43 号

文 科 編

目 次

マルクスと自由

—J. グレイの所説を中心として— …………… 白 石 正 夫 1

単文理解において精神遅滞者が示す

蓋然性ストラテジーについて …………… 松 本 敏 治 27

〈— san⁴〉の意味論：1つの形式と

複数の意味の対応について …………… 橋 本 邦 彦 49

学術研究発表集録（平4. 4. 1～平5. 3. 31）…………… 95

マルクスと自由
—J. グレイの所説を中心として—

白石正夫

Marx and Freedom

Shiraishi, Masao

Abstract

We have recently experienced the breakdown of 'socialism' in USSR and Eastern Europe. Why did 'socialism' fail? This is an urgent subject today to be made clear. Because socialism was proposed as an idea of a developed democratic society and the very development of democracy is the common aim of our humankind. And because the failure of 'socialism' is quite the one in democracy.

J. Gray attributes the failure of 'socialism' to Marx's theory. He argues that the chief defects of 'socialism' are unavoidable results of the serious attempt to realize Marxian socialism. He asserts that the totalitarianism in 'socialist' states is nothing but a predictable consequence of fundamental flaws in Marx's theory. And he points out that Marx, who was an avowed apostle of human freedom, came ironically to deny human freedom. This paper analyses these arguments of Gray.

目 次

はじめに	現代の思想的課題
一	「社会主義」失敗の原因
二	マルクスと疎外
三	マルクスの自由概念
四	非市場経済の不可能性
五	民主主義と所有形態

- 六 マルクスの社会主義像
- 七 資本主義と労働者の自由をめぐる

はじめに 現代の思想的課題

ソ連、東欧の「社会主義」諸国が崩壊するという、巨大な歴史的事件を、我々は経験した。我々の多くは、それら「社会主義」諸国は本来の社会主義の道を踏み外し、社会主義としては間違っており失敗だ、という認識をもってはいたが、それらが現実に崩壊するまでは、率直なところ予測していなかったと云っていいであろう。

さて、このような出来事を体験した我々が、世界史の発展の今日の段階に立って、考えなければならない思想的課題は、何だろうか。「資本主義は勝利した」として、現代資本主義のすべてを肯定し正当化して、これに安住したり、「歴史は終焉した」と悟り澄まし、また絶望したりすることは、求められている課題への解答となり得ないということだけは、明らかであろう。現代世界における貧困・飢え・奴隷状態を常態とする人々の大群、巨万の富と隣り合わせのホームレス・ピープルと過労死の山、これらが、我々が現代資本主義を賛美し、これに身を委ねて安閑としていることを許さないのである。それらが、我々を、次世代のより良き社会像の探求へと駆り立てずにはおかないのである。

ところで、そのような探求に際して、我々を導く指針となり、羅針盤ともすべきものは何だろうか。現代世界では、民主主義の原理がその指針とならなければならない、という点については合意が存在すると云っていいだろう。その点、我々は、「社会主義」は失敗した、資本主義も問題が多すぎる、ではどうすべきかと考えるに当り、行く先も分からず、羅針盤もなく途方にくれた状態であるわけではないのである。近代以来、人類は、民主主義の発展という方向に、自分たちの社会の進むべき道を明確に設定し、遅々とはあるが着実に前進してきたと云っていいであろう。この発展方向についての合意は、第2次大戦後、ファシズムの原理や植民地主義の崩壊とともに、一層広がり、普遍的確

認事項となったと云って差し支えないのである。

それゆえ、「ポスト冷戦時代」は、普遍的なものは何もありえず、暗中模索の中では、ナチズムも「民族の浄化」も王政の復活も、それなりの根拠を持ち相当の真理を体現しているのだ、などという議論には到底与することはできないのである。従って、今我々に課せられている思想的課題は、民主主義の方向に社会を発展させるに当り、如何なる問題や障害があるのかを明らかにすること、それらをいかに解決すべきかの方法を提示すること、これである。

さて、既存の「社会主義」の失敗の原因を解明することは、この課題の重要な一部分をなすと言えるであろう。なぜならば、社会主義は、民主主義の発展または徹底化、あるいは民主主義の実現として、資本主義の次世代の社会像として提起されたものであるからである。そして、民主主義の発展であるはずの「社会主義」の間違いや失敗とは、まさにその民主主義という点で決定的な欠陥を「社会主義」が持っていたということなのである。従って、民主主義という点でより良き社会を次代に展望するに当って、どのような問題があるのかを明らかにするためには、「社会主義」の失敗の原因を解明することは避けて通れない課題なのである。

筆者は、これまでもこの課題に答えようと試みてきたのであるが、小論もまた、このような試みの一部をなすものである。ここでは、「社会主義」の失敗の原因をマルクスの理論に求めている J. グレイの所説¹⁾を批判的に取り扱うことを中心に据え、それとの関連で G.A. コーエンの議論²⁾にも触れつつ、筆者なりのマルクス解釈も試みようとするものである。

一 「社会主義」失敗の原因

J. グレイは、既存の「社会主義」の失敗の内容を、次のように列挙している。即ち、エリート官僚による支配、経済的危機、人民の運動と精神的自由への抑圧、そして西側の技術と資本の輸入への依存、これらである。そして、彼は、その失敗の原因を次のように説明する見解を、アカデミズムにおける陳腐な決

まり文句だと批判する。その見解とはこうである。即ち、逆境の中で誕生し、敵対勢力に包囲され、外敵からの防衛の必要に苦しみ、遅れた反動的な住民を教化するという大仕事に悩まされ、今世紀の社会主義革命政府はどれも、マルクスの社会主義をその真の姿で実行するチャンスがなかったのであって、このような歴史的偶然事によって、マルクスの理論を判定し、これを間違いと評価することはできない、というものである。³⁾

さて、グレイは、これに対して待ったをかける。そもそもそのような見解の代表者たちにとっては、マルクス主義は、理論と実践の統一の模範例ではなかったのか。つまり、マルクス主義にとっては、実践は理論の試金石だったはずである。従って、実践が間違いなら、理論が間違っていたことになるはずだ。何故なら、理論は歴史とその教訓からの総括である、というのがマルクス自身の思想だからである。理論の唯一の源泉たる実践つまり歴史的経験、これから抽出されたものとしての理論、この理論を実践した結果が間違いなら、理論にその原因があるとするのが、理の当然というものである。⁴⁾

かくて、グレイは、次のように断ずる。既存の「社会主義」の主要な欠陥は、マルクスの社会主義を歴史の現実において具体化しようとする真剣な試みの不可避的帰結であり、構造的必然性をもったものである。そしてまた、マルクスの社会主義を実践した結果として生じた全体主義は、マルクス社会主義の理論的基礎にある根本的欠陥の明白な予期しうる結果である。このようにして、グレイは、自由の使徒を自認するマルクスの理論が、皮肉にも人間の自由を否定する結果を生み出す必然性を内包していたのだ、と結論づけるのである。⁵⁾

以上が、グレイの主張のアウトラインである。次節から、この主張を詳細に検討することとしよう。

二 マルクスと疎外

グレイによれば、疎外論はマルクスの全体系を貫いているものであり、そこでは、疎外とは、人間が自分の作り出したものに支配されることを意味してい

る。⁶⁾さらにグレイは考える。人間の不自由についてのマルクスの思想は、この疎外論に示されている。その思想の核心は、資本主義においては人間は市場の力によって支配され奴隷化されている、というものであり、これが、マルクスの資本主義否定の動機となっている、とグレイは主張する。従って、マルクスにとって資本主義の問題点は、資本主義における所得の分配の問題にあるのではなく、資本主義的私的所有にあるのでもなく、商品生産にこそある。何故なら、資本主義社会における人間の自由の喪失は、商品と商品交換法則とによって人間活動が支配されていることにあるからである。⁷⁾このようにグレイは理解し、その論拠として、マルクスの『経済学批判要綱』を引用している。この箇所は、疎外論が展開されているわけではなく、交換価値の実現としての流通について述べられている所なのであるが、ただその引用箇所の最後の部分をグレイは、疎外現象を叙述したものと理解しているのである。その最後の部分は次のように書かれている。「個人を越えた自立した力としての個人相互の社会的関係は、今やそれが自然力、偶然またはその他任意の形態で表象されようと、出発点が自由な社会的個人でない、ということの必然的帰結である。」⁸⁾この部分で、マルクスは、社会的な諸力の自立した存在が破壊されれば、疎外は克服され、人間の自由が達成できると考えた、とグレイは把握しているのである。従って、グレイにとって、マルクスの社会主義とは、商品生産の廃止を中心的内容とするものであり、生産者による生産の意識的・目的的統御を意味している。⁹⁾

ここで一言だけ口を挟んでおこう（グレイに対する批判は、後ほど全面的に行う）。上述のとおり、グレイにとって、マルクスの社会主義は、資本主義的私的所有の廃止を中心的内容とするものではない。何故なら、マルクスにとっては、資本主義の問題点は、資本主義的私的所有にあるのではないから。問題は商品生産と交換にあるのだから、社会主義の中心的内容は、商品生産の廃止であり、生産者による生産の意識的・目的的統御である。ならば、私的所有に基づく統制経済も社会主義だ、ということにならないか。ともあれ、マルクスと自由の問題に対するグレイの理解は、混乱ないし混同と誤解に基づいている。

この点の論証は後で行うとして、今少しグレイの説明に耳を傾けておこう。

次に、グレイは、上述の主張を補強するために、『資本論』から次の個所を引用している。「社会的な生活過程の、すなわち物質的な生産過程の姿は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的な計画的な制御のもとにおかれたとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てる。」¹⁰⁾もちろん、グレイは、この個所を、マルクスが疎外とその克服としての自由について語っているものとして引用しているのである。そこで、グレイは続ける、「社会主義では、生産様式は、交換のための商品生産から、使用のための財の生産へと転換される。資本主義の弁証法的否定として、社会主義は、資本主義的商品生産の組織原理の廃止、または超克として理解されるしかない。疎外の克服とは、マルクスの著作の中で他にどんな意味をもっているにしても、少なくとも、中心的には、このことを意味している。即ち、人間の生産活動が直接的であって、もはや商品生産制度によって媒介されていないこと、これである。」¹¹⁾従って、人間が社会主義で獲得する自由とは、不干渉としての自由や実行・享受といった個人の積極的自由ではなく、自立した社会的力や法則からの自由、資本主義的商品生産の廃棄によって得られ、生産の意識的計画化の中で行使される自由である。このようにマルクスを解釈するグレイにとっては、「社会主義と計画的生産とは、一つの、同じ生産様式の二つの相であり、中央計画は、現存社会主義経済の偶然的制度ではなく、社会主義のまさに本質なのである。」¹²⁾

以上のグレイのマルクス解釈を、グレイ自身の言葉でまとめると、次のようになる。「資本主義の不自由は、市場プロセス自体による労働の疎外にある。これを超克するには、商品生産の廃止と直接使用のための生産への転換によるほかない。この後者の要件こそ、マルクスの社会主義構想の中心的要素である。」¹³⁾

さて、周知のとおりマルクスは、労働の疎外については、『一八四四年の経済学・哲学手稿』で述べている。筆者は、別稿でこれを分析し、結論として次のように指摘しておいた。「マルクスは、疎外された労働を、生産手段の資本主義的所有に基づく、資本と労働者の支配・従属関係から生ずるものと見てい

るのである。市場・流通過程から生ずる疎外ではなく、生産過程から生ずる疎外について語っているのである。」¹⁴⁾つまり、マルクスは、疎外を市場の力に人間が支配されていることなどと捉えていたわけではなく、資本と賃労働との生産関係とその下での生産過程から生ずるものと見ているのである。本来人間の自己実現活動であり、本質的に人間的活動である労働が、資本主義社会では、自己喪失活動となり、非人間的活動となってしまうこと、マルクスは疎外をこのように理解しているのである。それゆえ、マルクスにとっては、疎外の克服、即ち人間の自由な自己実現は、「商品生産の廃止と直接的使用のための生産」つまりは市場の廃止によって達成されるのではなく、資本主義的私的所有の廃止によってこそ獲得できるのである。この点で、グレイは決定的に誤解しているのである。グレイはまた、既述の通り、マルクスにあっては「人間が社会主義で獲得する自由は、不干渉としての自由や実行・享受といった個人の積極的自由ではない」と理解しているが、疎外の克服としての自由とは、人間の自己実現の自由を意味している事は明らかであって、まさにグレイがいうところの「実行・享受と云った個人の積極的自由」そのものである。(マルクスの自由概念が、「不干渉としての自由」を含んでいるかどうかは、ここで詳論しない。ただ、マルクスは、自己の社会的活動の当初から、思想の自由、言論の自由、出版の自由等「不干渉としての自由」のために闘い続けた、この点を想起しておきたい。そして、人に自己実現ないし幸福を強制することはできない、という一般論を付け加えるにとどめたい。) グレイはまた、マルクスの疎外論、即ち資本主義社会における人間の不自由に関する思想こそ、マルクスの資本主義否定の動機となっており、根底的論点をなしていると把握しているのであるが、市場から疎外が生ずると捉えてしまったために、疎外にかかわっての資本主義の問題点は資本主義的私的所有にある、とするマルクスの肝心の論点が分からなくなってしまったのである。従って、資本主義の否定としての社会主義の本質的特徴が、商品生産の廃止と直接的使用のための生産、即ち市場の廃止にあるとしか認識できず、疎外の克服としての「マルクスの社会主義構想の中心的要素」が生産手段の社会的所有であるという、この点に思いが及ばなくなって

しまったのである。大きな誤解である。

三 マルクスの自由概念

さて、これまでの議論を注意深く見れば、既に明らかなように、マルクスの自由概念には、二つのものが含まれている。一つは、疎外とのかかわりで捉えられている自由であり、もう一つは、自立した社会的力や法則とのかかわりで論じられている自由である。一方の不自由は、人間の自己喪失、人間性の否定としての不自由、他方の不自由は、個人を越えた社会的力や盲目的法則に支配され、個人の思い通りにならないこととしての不自由である。前者の不自由は、資本主義的私的所有の下における生産過程から生ずる。後者の不自由は、流通過程即ち市場関係から生ずる。(但し、後者の不自由の原因は、ただの市場関係ではなく、資本主義的私的所有を前提とした市場関係にあるという側面を見落としてはならない。資本主義的私的所有という前提がなければ、市場関係だけを原因とする不自由は、前提つきの不自由より軽減すると考えられるからである。)前者の不自由の克服、即ち自由の実現は、資本主義的私所有の廃止と、生産手段の社会的所有によってもたらされ、後者の不自由の克服としての自由は、生産の組織化・計画化・即ち意識的統御によって実現される。

ところで、マルクス主義は、資本主義の基本的矛盾を、生産の社会的性格と取得の私的資本主義的形態との矛盾として理解する。つまり資本主義の本質的特徴をその生産手段の所有関係にあると見るのである。そして、分配・交換・消費の形態は、この本質的所有関係に規定されて、それにふさわしい形態を受け取るのである。即ち、資本主義的市場関係・流通過程がそれである。個々の工場における生産の組織的性格と社会全体での生産の無政府性という矛盾は、先の基本矛盾の、流通過程における発現形態である。即ち、資本主義的取得形態であるがゆえに、市場は無政府的性格をもち、個人は、自分の意思から独立した盲目的法則に支配され、不自由となる。つまり、資本主義的所有関係から生ずる疎外としての不自由が、基本的なものであり、市場関係における不自由

は、疎外としての不自由の現象形態として、所有関係を前提としたものなのである。従って、先にも少し触れたが、論理的には、資本主義的所有関係がなくなり、市場関係だけが残った場合には、市場関係における不自由は、なくなりはないとしても、軽減されるか形が変わるであろうが、市場関係がなくなっても、所有関係が変わらなければ、疎外としての不自由はなくなりならず、軽減されもしないと考えられる。

さて、この辺りで、グレイの議論に戻ることにしよう。グレイは、マルクスの自由概念を、どのように捉えていたか。既述のように、マルクスの言う資本主義における不自由とは、疎外としての不自由である、とグレイは考えた。ところが、グレイにあっては、その疎外としての不自由は、資本主義的所有関係のもとでの生産過程から生ずる人間の自己喪失というマルクス自身の意味ではなく、市場の力によって支配されて人間が自由を失っていることを意味していた。マルクスが疎外を市場から生じるものと看做している、とグレイは誤解したのである。つまり、マルクスの二つの自由概念、即ち「疎外と自由」と「市場と自由」とを、グレイは混同してしまっているのである。疎外が市場によって生じると理解したために、「疎外と自由」にかかわってのマルクスの思想が、「市場と自由」にかかわっての意味を持つものとされてしまい、マルクスの二つの自由概念が一つの意味しか持たないものとされているのである。即ち、マルクスの自由概念は、「疎外と自由」一本だけであり、しかも「疎外と自由」は「市場と自由」を意味するのだ、というように矮小化されているのである。それゆえに、グレイは、マルクスの疎外論こそ彼の資本主義拒否の動機づけとなっている、と捉えながら、マルクスにとっての資本主義の問題点は、資本主義的私的所有の問題なんかではなく、商品交換を支配する盲目的社会的力の方である、としてしまう。そこで、疎外の克服としての社会主義の中心的内容は、資本主義的私的所有の廃止ではなく、商品生産の廃止と直接的使用のための生産だとされる。肝心要のより本質的内容が無視され、その現象形態の方だけが重視される。そしてさらに、社会主義における生産の意識的・目的的統御とは、この「直接的使用のための生産」を意味すると看做され、この点でマルクスが

市場の廃止を主張したと断定される。「この点で」といったのは、他に、このことを根拠づけるマルクスからの直接の引用を、一切していないからである(このことは、また後に触れよう)。

ところで、グレイは、マルクスの疎外論について述べながら、マルクス自身の疎外に関しての叙述を全く引用していない。そのかわりに、先に紹介したように、マルクスの流過程・市場に関する記述だけが引用されていた。それは、グレイが、疎外を市場を原因とするものと誤解し、「疎外と自由」を「市場と自由」と混同していた結果であり、また原因でもあったのである。それと同時に、グレイは、マルクスの自由概念を論じながら、マルクスが自由について豊かに語っている箇所を全く引用していない。そこで、マルクスの自由観を確かめるために、ここでマルクス自身を引用しておこう。「じっさい、自由の国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなったときに、はじめて始まるのである。つまり、それは、当然のこととして、本来の物質的生産の領域のかなたにあるのである。未開人は、自分の欲望を充たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないが、同じように文明人もそうしなければならないのであり、しかもどんな社会形態のなかでも、考えられるかぎりのどんな生産様式のもとでも、そうしなければならないのである。彼の発展につれて、この自然必然性の国は拡大される。というのは、欲望が拡大されるからである。しかしまた同時に、この欲望を充たす生産力も拡大される。自由はこの領域の中ではただ次のことにありうるだけである。すなわち、社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行なうということである。しかし、これはやはりまだ必然性の国である。この国のかなたで、自己目的として認められる人間の力の発展が、真の自由の国が始まるのであるが、しかし、それはただかの必然性の国をその基礎としてその上のみ花を開くことができるので

ある。労働日の短縮こそは根本条件である。」¹⁵⁾ここで、マルクスは、自分の二つの自由概念を明確に区別して述べている。ところが、グレイは、自己の主張のまとめとして、次のように結論づけている。「マルクスの自由観は……不干涉とか自己実現と云った自由主義的概念のなんらかの変形物ではない。むしろ、マルクスの自由観は、経済的、社会的生活の合理的計画化による、集団的自己統治を意味している。マルクスの自由は、非人格的な社会法則や力の支配下での自己喪失としての疎外、これの反対物である。」¹⁶⁾このように、先にも指摘したが、グレイは、マルクスの二つの自由概念の内のより本質的な方を無視し、または理解できず、もう一方の概念だけを取り上げて、これをただ一つのマルクスの自由概念だとし、歪めてしまっているのである。そしてさらに、マルクスが個人の自由の法的保護を与えようとしなのは、「そのような保護は、彼が考える自由、即ち社会生活の意識的、協同的計画化の実行を危険にさらし、また制限するからである」と断じているのである。¹⁷⁾

四 非市場経済の不可能性

既述のとおり、社会主義では、交換のための商品生産から直接的使用のための財の生産へと転換されることによって、疎外は克服され、生産の意識的・計画的統制としての自由が獲得される。このようにマルクスを理解したグレイにとって、マルクスの構想する社会主義では、市場の廃止と中央計画指令型経済の採用は当然のことと思われた。そして、このマルクスの社会主義は、マルクスの予測できなかった不可能性を孕んでいる、と以下のように論証する。

まず、グレイは、人間の知的不完全性ないし限界を指摘する。何百何千万の人々や多数の経済体の間に分散している需要や供給その他に関する情報、これらに関する詳細な情報が、合理的資源配分のためには必要とされる。社会主義の経済計画を成功させるためには、これらの情報を、単一の中央計画機構に集中しなければならない。ところがこれらの情報は、口に出して云われぬもの、身体で覚えたもの、一時的ですぐ古くなってしまふもの等々であって、これら

を利用可能な合理的な形で単一体に集中することは到底不可能である。即ち、中央計画者は、計画を成功させるために必要とする情報を認識することができない。市場は、市場価格を通じて、これらの無数の複雑に入り組んだ情報を伝える。市場を廃止すれば、この情報を有効に伝えるものがなくなり、これらが認識不可能となり、合理的・成功的中央計画は、そもそもの初めから不可能である。このようにグレイは主張している。¹⁸⁾この辺りは、なかなか説得力がある、と筆者は考える。

次に、グレイは、社会主義計画と個人の自由との両立不可能性に議論を進める。「市場競争のかわりに中央計画を、というマルクスの企図が不可能性を内包しているとすれば、マルクスの社会主義秩序には、少なくとも一種類の自由が最初から危険にさらされていると思われる。即ち、社会主義経済システムの失敗の原因に対する知的探究の自由がそれである。」¹⁹⁾そして、マルクス主義の教義はこれらの失敗とは無関係だ、と説明するためのイデオロギー的コントロールの機関がすぐに必要となる、とグレイは語る。²⁰⁾グレイは、この自由の欠如は、社会主義に不可避のより広範な不自由の一例に過ぎないとして、さらに議論を展開する。即ち、社会主義経済計画は、マクロ・コントロールとは異なり構造的計画であって、経済活動の詳細なパターンについての決定と実行を含んでいる。このような中央計画は、民主的プロセスで処理できない。また、この中央計画が強制的なものではないとするためには、ある程度の道徳的コンセンサス、人生観や価値観の一致を前提とする。その道徳的一致がないとすれば、中央計画者は、諸々の必要や価値について、それらの優先順位について、自分の判断を強制する以外にない。²¹⁾いずれにしろ、マルクスの矛盾のない計画化社会という理想は、人間と人生の多様性を否定し、特色ある文化的伝統や特殊な文化的価値を消し去ってしまう企てであって、恐るべき画一主義というほかない。グレイはこのように指摘する。²²⁾ともあれ、一旦計画が立てられれば実行されねばならず、それは多方面に経済変動の負担を負わせる。この結果生ずる紛争は、強制的手段で解決されるほかになく、その結果として労働者の自由が真っ先に失われる。²³⁾以上のように、グレイは、社会主義における

不自由を摘発する。中央計画経済という、もともと不可能なことを実現しようとする真剣な試みが、全体主義体制と自由の抑圧という結果を生み出したというのである。²⁴⁾

さらに、グレイは、市場社会主義の問題点にも触れている。即ち、市場社会主義は「社会主義命令経済に付き物の不可能事を免れるが、マルクス主義の観点からは深刻な不利益を被る。つまり、それは、商品生産を廃止せず、従って、経済活動のパターンの決定を、生産者の集団的意志ではなく、人間の行為の予期せざる結果に委ねている。それゆえ、それは、マルクスの企図した疎外の克服を実現できない。」²⁵⁾そして、市場社会主義は、社会主義的公正や平等という価値を保持するために、また、自主管理企業相互間の関係を調整するために、継続的で永久的な中央政府の干渉を必要とする。これは、市場社会主義が擁護する自治・自主管理を、ひどく傷つける。従って、自由への危険は、命令経済的社会主義よりは少ないとはいえ、やはりその危険は依然として深刻である。このようにグレイは述べている。²⁶⁾

さて、中央計画指令型経済は、計画に合理性を与え、指令に成功の保証を与えるために不可欠の情報を認識できず、非効率で莫大なコストの負担を、その社会に強いる。また、このタイプの「社会主義」は、個人の自由に対する危険を内包している。このようなグレイの指摘は、正しいと言っていいだろう。既存の「社会主義」諸国も、事あるごとに市場経済を導入しようとしてきたし、今日もその方向が目指されている、というのは周知の事実である。また、知的探究の自由をはじめとする個人の自由を保障しない「社会主義」とは、自己の失敗を正し、自己を維持し発展させるために不可欠の手段を、自ら投げ捨てていることを意味している。つまり、それは、自損的・自殺的「社会主義」であって、当然崩壊する以外に進む道はなく、まさに、その通りになっている。従って、それがマルクス理論に内在するものという批判は、当たらないであろう。さらに、グレイの、マルクスに対する文化的価値の画一主義という批判は、相手を間違っており、資本主義にこそ向けられるべきであろう。何故なら、資本最大化を唯一の目的とし論理とする資本主義は、資本のブルドーザーで世界中を

均し、世界を資本色一色に染めずにはおかないものだからである。

ところで、中央計画指令経済を批判し、市場の有効性を評価するからといって、一切を市場経済に委ねる市場経済万能主義が正しいということにはならないであろう。人類の生存という視点から見て、環境・エネルギー・資源問題の解決を市場経済に任せてしまうことはできなからう。民主主義社会の実現という視点から見て、土地・教育・医療・老人・障害者等々の問題も、市場経済によっては解決できない。従って、体制の如何を問わず、現代社会は、全社会的規模で、また地球的規模でも、経済活動の計画化、組織化を迫られているのである。それゆえに、そのような組織化・計画化が、個人の自由を圧殺し、その社会を自損や自殺へと追い込むことのないように、政治・社会体制の民主主義が不可欠なのである。この点、中央計画指令型経済だけでなく、現代資本主義経済も、政治権力と一体化して、ファシズムへ向かおうとする不断の傾向性もっている、この点の指摘が、是非とも必要である。従って、中央計画経済を批判した結果が、資本主義市場経済こそ自由で効率的で万々歳ということになってしまうのではお話にならない。もちろん、お話にならないというのは、民主主義的な意味で、人間にとってということであって、資本にとってというのなら、話は別である。

五 民主主義と所有形態

さて、グレイは、既に見たとおり、マルクスの社会主義は中央計画経済だ、と考えた。なぜなら、マルクスを社会主義へと動機づけたものは、疎外の克服という課題であり、資本主義社会における疎外は、市場を原因としているからであった。従って、疎外の克服としての社会主義は、市場の廃止を中心的内容としており、市場の廃止によってこそ自由が実現できる。これがマルクスの理論的核心だ、とグレイは確信した。そして、この市場の廃止としての社会主義は、不可能事の実行を意味しており、結果として巨大な無駄と自由の圧殺を生み出しただけである。従って、社会主義は駄目で、資本主義こそ正しいのだ、

というわけである。しかし、このような議論にとどまっていたのでは、民主主義的社会像の探究という我々の課題にとっては、お話にならない。マルクスは、自己の社会主義構想に、人間の自由と民主主義の実現の夢を託した。この点は、グレイも否定してはいない。つまり、マルクスは、民主主義を実現するものとして、社会主義を構想したのである。そして、マルクスにとっては、疎外の克服としての社会主義は、グレイが誤解したように、市場の廃止ではなく、生産手段の社会的所有を中心的内容としていたのである。何故なら、疎外という人間の不自由は、生産手段の資本主義的所有を原因としているからである。それゆえ、自由と民主主義にとっての社会的所有という中心的内容の持つ意義を見ないで、市場廃止だから駄目と切り捨ててしまうのは、余りにも単純な暴論であろう。汚れた行水の湯を流すのに、赤ちゃんまで一緒に捨ててしまうようなものである。それゆえ、我々は、ここで民主主義と生産手段の所有との関係に触れておく必要がある。我々は、政治の分野において民主主義を論ずる際には、人民が政治活動の主体であることが大切だと考える。人民が政治活動の主体であるとは、人民が主権者であるということである。人民が主権者であるとは、人民が、主権の所有主体であり、主権の行使主体でもあり、さらに人民が主権行使の目的でもある、このことを意味している。これが、リンカーンのゲティスバーグ演説の内容である。即ち、'government of the people, by the people, and for the people'である。ところで、我々は、この民主主義を、政治の分野だけにとどめておく必要はないし、むしろ積極的に経済の分野にも導入する必要があると考える。何故なら、経済の分野における民主主義がなければ、政治分野の民主主義は、裏書きを欠き、形式的なものにとどまり、形骸化する危険があるからである。マルクスも、人間の解放について、歴史的にまずは政治的解放を、次いで経済的解放を考えた。²⁷⁾経済の分野に民主主義を導入するには、我々は、政治分野における民主主義と平行に考えることができるし、また考えなければならない。即ち、人民が経済活動の主体となることである。人民が経済活動の主体になるとは、経済活動の手段たる生産手段の所有権を持つことである。これが、経済分野において、政治において人民が主権者で

あることに対応するものである。経済において人民が主権者であることと言ってもよい。それは、つまり、人民が、生産手段の所有主体であり、行使主体であり、行使の目的でもある、ということである。我々は、次代により民主主義的な社会を展望しようとするならば、経済においても人民が主権者であるという、この点を考慮に入れなければいかなないと考える。生産手段の所有の問題を全く取り上げず、ただ市場経済であるかどうかだけを問題として、資本主義を称賛する者は、人類にはより良き明日はないとする「歴史の終焉」の立場に立つものである。マルクスも、人民が生産手段の所有主体となるという点を、次のように指摘していた。「(コミュニオンは) 現在おもに労働を奴隷化し搾取する手段となっている生産手段、すなわち土地と資本を、自由な協同労働の純然たる道具に変えることによって、個人的所有を真実にしようと望んだ」²⁸⁾「労働者は、その労働手段の所有者となるときにのみ、自由となる——これは、個人的形態あるいは集团的形態をとることができる——個人的所有形態は経済的發展によって排除され、日ごとにますますそうなる——従って共同所有の形態だけが残る。」²⁹⁾ 経済的發展の結果、生産手段の可能な所有形態は、共同的形態だけになってきている。この共同的所有の中で、個人が生産手段の真実の所有者となるときに、個人は自由となる。このようにマルクスは語っているのである。

六 マルクスの社会主義像

既述のとおり、グレイは、マルクスを市場廃止論者と極め付けている。ところが、そのように極め付けることができる証拠を示していない。つまり、マルクスが、端的に社会主義では市場は廃止されると述べている個所を、グレイは引用していないのである。先に示したように、グレイが直接マルクスを引用している二つの個所は、いずれも、市場とのかかわりでの人間の不自由と、生産の意識的統制としての自由の獲得とについて語っているところである。しかも、グレイは、これら部分を、マルクスが疎外とその克服としての自由について語っ

ているもの、として引用していたのである。そして、マルクスは、疎外の克服として社会主義を構想したのであり、疎外の原因が市場にあると考えたのであるから、社会主義での市場の廃止を主張したのは当然だ、とグレイは断定したのである。しかし、生産の意識的統制ということが、直ちに市場の廃止を意味するのだとは言えない。市場経済のマクロ・コントロールということがありうるからである。グレイも、これがマクロ・コントロールを意味するなら、マルクスを市場廃止論者と断じられないと分かっていたようである。それゆえ、先に見たとおり、マルクスの社会主義経済計画は、マクロ・コントロールではなく構造的計画であり、経済活動の細部にわたっての決定と実行を含んでいる、と述べているのである。しかし、これを論証するための引用は、全くしておらず、独断というほかない。

では、マルクス自身は、自らの社会主義経済をどのようにイメージし、なんと語っているのか。マルクスは、社会主義社会について、青写真のようなものはほとんど描いていない。彼は、資本主義分析の叙述の折々に、断片的に、しかも、当の資本主義批判から語りうる範囲内の大まかなアイデアや基本的な理念・原理を語っているだけで、将来の社会主義社会像を細部にわたって描いてはいない。二三引用しておく、それらは次のとおりである。「共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体」³⁰⁾「社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行うということ」³¹⁾「協同組合的生産が、……資本主義制度にとってかわるべきものとすれば、もし連合した協同組合諸団体が共通の計画にもとづいて全国の生産を調整し、こうしてそれを自分たちの統制のもとにおき、資本主義的生産の宿命である不断の無政府状態と周期的痙攣とを終わらせるべきものとすれば——諸君、それこそは Kommunismus、"可能な" Kommunismusでなく

て何であろうか？」³²⁾ここで述べられている原理は、グレイ自身が先にマルクスから引用した個所で、物質的生産過程を「自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御のもとにおく」と表現されているものと全く同じである。即ち、ここでは、具体的に市場の廃止とそれにかわる経済組織を提案しているわけではなく、経済過程を「意識的計画的制御のもとにおく」という大まかな原理が語られているだけなのである。つまり、「細部にわたる決定と実行を含んだ構造的計画」が述べられていたのではないということである。

ところが、マルクスの著作の中に、社会主義経済の姿を少し具体的に述べていると思われるところがある。そこには、市場の廃止を示唆しているを取られかねないような叙述がみられるのである。その部分をここで検討しておこう。まず『資本論』の商品の物神的性格についての節では、次のように述べられている。「共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現するのであるが、ただし、個人的にはなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物は、ただ彼ひとりの個人的生産物だったし、したがって直接に彼のための使用対象だった。この結合体の生産物は、一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は再び生産手段として役立つ。それは相変わらず社会的である。しかし、もう一つの部分は結合体成員によって生活手段として消費される。したがって、それは彼等のあいだに分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに対応する生産者たちの歴史的発展度とにつれて、変化するであろう。」³³⁾ここで、まず明らかなことは、ロビンソンの生産物は、直接的・個人的使用のための生産物であること。それに対して、社会主義社会では、生産物は社会的生産物であり、個人的使用のためには分配されなければならない。また、社会的分業を前提としているから、生産は直接的使用のための生産ではありえず、他の社会成員のための生産であり、従ってまた、生産物は分配されねばならないこと。これらが明らかと言えるだろう。既述のように、グレイは、「直接的使用のための生産」をマルクスの社会主義

の中心的アイデアだと主張していた。だが、ロビンソンの島とは異なり、社会主義社会での生産が直接的使用のための生産でないことは明らかである。なるほど、それは、資本主義社会とは異なり、資本最大化のための商品生産ではなく、社会全体にとっては、直接的使用のための生産と言えるかもしれない。しかし、社会主義社会でも、生産は、個々の企業体間で分業して行われるのは当然で、生産物は、分配されることによって、初めて使用されるものとなるのである。この「分配されなければならない」ということが、実は様々な意味をはらみ、重大な問題を生じさせることになる、と筆者は考える。(この点は後ほど触れる。)ところで、先に引用した個所に先だって、マルクスは、「共同的な、すなわち直接的に社会化された労働を考察するために……最も手近な例は、自分の必要のために……生産する農民家族の素朴な家長制的な勤労である」と述べている。³⁴⁾しかし、これは、ロビンソンの島の特徴、つまり、大世帯となったロビンソン家族の例とは言えるが、社会主義社会の特徴を示している例とは言えないであろう。何故なら、そこでは、生産物は分配されずに直接使用されるであろうから。ともかく、以上のところでは、マルクスが、市場の廃止と直接的使用のための生産を、社会主義の中心の特徴と考えていたとは言えないだろう。但し、「農民家族」と「ロビンソン」を、社会主義と同じ特徴を持つ例として、マルクスが挙げているのだと短絡的に理解すれば、そのような誤解が生ずるかもしれないとは言えるだろう。

さて、いずれにしろ、マルクスは、上記の部分では、「分配の仕方」については具体的ににも述べていない。それは生産様式の発展につれて変化する、とだけ指摘している。次に、『ゴータ綱領批判』を見ておこう。「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会の内部では、生産者はその生産物を交換しない。……何故なら、いまでは資本主義社会とは違って、個々の労働は、もはや間接にではなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである。」³⁵⁾生産手段の共有を土台とする社会では、個々の労働は、はじめから社会的労働であって、その労働の生産物は、社会的必要によって生産されているのであるから、商品として交換される必要がないというのである。これだけを見ると、市場の

廃止が当然と語られているようにも思える。しかし、まだ、ここでは、社会全体としての直接的な使用について語られているだけであって、それがどのように分配されるのかは、次の問題である。

では、どう分けるのか。必要な人が必要なだけ受け取るのか。そうはいかない、とマルクスは指摘する。何故なら、この社会は、まだようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会だから、まだ経済的にも道徳的にも精神的にも、旧社会の母斑をおびている。従って、商品交換と同じ原則で、人々は、自分の支出した労働量に応じて受け取る以外にない。即ち「個々の生産者は、これこれの労働（共同のファンドのための彼の労働を控除したうえで）を給付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段をひき出す。」³⁶⁾つまり、能力に応じて働き、労働に応じて受け取る、というのが、分配の原則である、というのである。この個所でマルクスが述べているのは、結局次の様なことである。この社会は分業が行われているから、各人は、直接的な使用のためではなく、他人の使用のために生産する。従って、労働時間証明書のごとき、一般的等価物の役割を果たすもので、それと等しい価値表示を持つ品物と取り替える必要があるのである。このような形での分配は、限りなく、貨幣による商品交換に近いものと言わねばならない。それゆえ、マルクスも、「個人的消費手段が個々の生産者のあいだに分配されるさいには、商品等価物の交換の場合と同じ原則が支配し、一つのかたちの労働が別のかたちの等しい量の労働と交換されるのである。」と述べているのである。³⁷⁾「労働の収益」や「公正な分配」というゴータ綱領の表現について、厳しく検証し、正確な概念の使用を説くマルクスが、一方で「生産者はその生産物を交換しない」と言い、他方で「一つのかたちの労働が別のかたちの等しい量の労働と交換される」と語ってしまっているのである。即ち、この社会では、直接的な使用のための生産ではなく、交換のための生産が行われることを事実上認めていると言えよう。マルクスは、「証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから……消費手段を引き出す」などと、あたかもこの社会の経済システムの細部にわたる青写真を描くような

表現をし、しかもそれを物々交換的配給社会というようなイメージで述べている。しかし、これは比喩的な表現にすぎず、マルクスの真意は、ゴータ綱領の「公正な分配」という規定に関連して、原理的なことを述べることにあったのであって、社会主義社会での分配の具体的な仕方を詳しく描くことはなかった。従って、彼は「いわゆる分配のことで大さわぎをしてそれに主要な力点をおいたのは、全体としては誤りであった」と反省し、「いつの時代にも消費手段の分配は、生産諸条件そのものの分配の結果にすぎない。しかし、生産諸条件の分配は、生産様式そのものの一特徴である」とし、資本主義的生産様式にはそれなりの、社会主義にはそれなりの、消費手段の分配が生じる、と言う原則をおさえて、この部分の叙述を締めくくっているのである。³⁸⁾

以上のマルクスの主張の一部を取り出して、これを教条的に解するところから、彼の社会主義には市場が存在しない、とみなされるようになったのではなかろうか。しかし、ロシア革命直後の一時期の経験の後には、ソ連も市場経済を導入する方向に進んだのであって、上のような解釈の誤りが現実によって検証されたと言えよう。さて、マルクスの「資本主義から生まれたばかりの共産主義社会」が、細部はともかく、概ね商品交換的、市場経済的特徴をもっているという点について、もう一言だけ述べておきたい。その社会は、分業によって、他人の使用のための生産をするから、生産者の労働が社会的に有用であるかどうかは、社会的必要によって計画された生産であるというだけでは保証されず、その労働生産物が実際に交換され使用または消費されることによって初めて確証されるのである。つまり、社会的必要によって作られても、不良品として引き取り手が誰もいないということがありうるからである。このような事態を避けるためには、市場競争が必要ということになろう。さらに、マルクスは、この社会での分配が「労働に応じて」行われる理由として、この社会がまだ資本主義社会の母斑をおびており、従って、商品の等価交換と同じ原則が支配するほかないからだ、と述べていた。しかし、それだけの理由でないことは明らかである。何故なら、その社会は、マルクス自身が述べているように「それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではない」からである。即ち、未だ

その社会は、程度はともあれ、希少性を特徴としているのである。希少なものを「公正」に分けるために、等しい尺度が必要であり、それは、労働量（等しい質という点も勿論含まれている）しかあり得ないということなのである。ところで、この希少性社会で生産力を発展させるためにはどうすればよいか。これも社会的必要による計画で、というだけでは不十分であろう。つまり、個々の生産者を、生産性の向上へと動機づけるためには、それだけでは駄目であって、何らかの個人的欲望の刺激による競争が必要だということである。従って、ここにも市場経済の必然性がうかがえる。勿論、これは市場万能論でないことは既に述べておいたし、より人間的な社会のためには、欲望充足をめざしての競争社会を、人間的諸能力の発揮をめざす社会へと転換する必要がある、という点を前提とした上での話である。

七 資本主義と労働者の自由をめぐる

最後に、本節では、これまでの議論に関連して、資本主義社会における労働者の不自由というテーマに触れておきたい。ここで取り上げるのは、G. H. コーエンの主張、および、これに対するグレイの批判である。

コーエンの主張はこうである。資本主義社会では、プロレタリアはプロレタリア階級から脱出する自由があり、その階級にとどまって労働力を売ることを強制されているわけではない。しかも、どのプロレタリアにも、その脱出のチャンスは等しく存在している。但し、その出口の数は少ない。従って、ある人が脱出する自由は、他の人がそうしないということを条件としての自由である。即ち、各人は、他の人が同様の自由を行使しないという条件でのみ自由である。一人が自由を行使すれば、他はそれを失うのである。それゆえ、たとえすべてのプロレタリアにプロレタリア階級を脱出する自由があるとしても、プロレタリア階級は囚われた階級である。以上である。³⁹⁾

これに対するグレイの批判は、大要次のとおりである。彼は、まずコーエンの主張を、次のようにまとめている。ある労働者が資本家になる自由は、他の

労働者が同様の選択をしないということに依存しているから、階級としての労働者は、資本主義社会では不自由である。これに対して、グレイは問う。一体資本主義のもとで、どのくらいの数の労働者が、そしてまたどのくらいの期間資本家になれば、労働者階級の不自由ということが否定できるのか、あるいはまた、資本主義が資本主義でなくなってしまうのか。そして、グレイは指摘する。コーエンの主張が意味するところは、結局、すべての、あるいはほとんどの労働者が資本家になれるのでなければ、労働者は階級としては自由といえない、というものである。だが、これはおかしいとして、グレイは電話システムを例にあげて皮肉っている。電話システムの加入者は誰も、他のすべての、あるいはほとんどすべての加入者と同時に、電話システムを使用できないなら、電話利用者階級は、そのシステムによって不自由にされる。こんな馬鹿なことは誰も言わないだろう。そもそも社会制度というものは（例えば最低所得保障制度）、制限的利用のもとでのみ成り立ちうるのものであって、このことをもって、その制度の利用者階級全体を不自由にするものだと非難することは、間違いだからである。以上である。⁴⁰⁾

コーエンは、グレイによって手玉に取られ、またいい様に料理されている、といえよう。グレイは、資本主義のもとでの労働者の不自由を主張するマルクス主義者の議論の中で、最近では最も強力なものとして、コーエンを取り上げているのである。⁴¹⁾しかし、また、なんとも立派なマルクス主義ではあることだ。全体、資本主義社会における労働者の不自由とは、資本家になる自由があるかないかということに関する問題なのか。ほとんどの労働者が資本家になる自由がないから、労働者は不自由なのか。奇妙な議論である。資本主義社会は、身分制社会ではないのであるから、誰も労働者であることを強制されるわけではない。誰でも資本家になる自由はあるし、またほとんどの人は資本家にはなれない。こんなことは自明のことである。しかし、ほとんどの労働者が資本家になれないから、労働者は不自由だ、などとは誰も考えはしない。資本主義社会だから、労働者階級が存在するし、発達した資本主義社会では、労働力人口中、労働者は圧倒的多数である。労働者の中の誰かが、労働者をやめて資

本家になったとしても、必要ならその後はすぐに補充され、いつでもその社会の資本主義の発展段階に対応した割合で、労働者階級の大群が存在するのである。その労働者階級に属する人々は、資本との関係の中で、搾取され、支配され、疎外されているのである。それゆえ労働者は不自由なのである。これが、資本主義社会における労働者の不自由の内容なのである。この不自由を基礎として、市民として社会的にも、国民として政治的にも支配され、不自由を強いられるということがあるのである。何が不自由なのか。自由に自分にとっての価値を選び、その価値観に基づいて、つまり自分の意志で、自分の生活と人生を営む、このことができないのである。人間らしい暮らし、いわゆる自己実現が自由にできないから、不自由なのである。人間は、資本家になることを目的として生きているわけではない。資本家になることが、誰にとっても自己実現を意味するわけではない。従って、資本家になれないことが、労働者の不自由の内容だなどというわけではなく、また、それが労働者階級全体として不自由であるということの意味だというわけでもないのである。

先にグレイの疎外に関する議論を見たが、彼は、労働者の疎外を、市場に原因するものとしか看做さず、肝心要の生産関係を全く無視していた。ここでも全く同様である。そしてまた、このグレイが、最強のマルクス主義論者として持ち上げるコーエン自身が、同じく市場論者なのである。二人は、同じ穴の中で議論しているのである。資本主義市場社会では、誰でも資本家になる自由が等しくあり、誰も労働者になるよう強制されない。しかし、みんなが資本家になってしまったのでは、資本主義でなくなってしまうから、全員が資本家になる自由はない。従って、労働者は不自由だ。これがコーエン。全員が資本家になれないのは当たり前であって、それが労働者の不自由を論証するものだなどというのは馬鹿げたこと。市場では、資本家だって自由ではなく、思い通りにならない市場の動きに翻弄され、資本家である自由が保障されているわけではなく、労働者に転落することもある。これがグレイである。何とも宙に浮いたような議論である。それは、資本と労働者という関係の中で、労働者の不自由を捉えないところに原因があるのである。J. ロールズは「自由市場の利用と生産

用具の私的所有との間に本質的な結びつきがないことは自明である」と述べている。⁴²⁾つまり、資本主義だけではなく、社会主義も市場経済を利用するのである。ということは、資本主義固有の本質は、市場経済という点にはなく、生産手段の資本主義的所有という点にある、ということである。この自明の点が理解できず、コーエンもグレイも、言わば副次的、技術的な市場経済という点に、資本主義の本質を求め、ここで労働者の自由の問題を論じてしまったのである。生産手段の所有に基づく生産関係という本質的な所で、労働者の不自由を見ず、変な穴に入って見ようとするから、議論が宙に浮いてしまい、現実が認識できなくなってしまうのである。

註

- 1) 小論で取り上げるのは次の文献である。John Gray, "Marxian Freedom, Individual Liberty, and the End of Alienation," in Ellen Frankel Paul et al. eds., *Marxism and Liberalism* (Oxford, 1986).
- 2) 次のものを取り上げる。G. A. Cohen, "Capitalism, Freedom and the Proletariat," in Alan Ryan ed., *The Idea of Freedom* (Oxford, 1979).
- 3) Gray, *op. cit.*, p.160.
- 4) *Ibid.*
- 5) *Ibid.*, p.161.
- 6) *Ibid.*, p.170.
- 7) *Ibid.*, p.171.
- 8) *Ibid.*, p.172. この英文は、Karl Marx/Friedrich Engels, *Gesamtausgabe* (以下小論では、本書は、MEGA と略記す), II-1.1, S.126. と異なっている。従って、ここでは、独文をもとにしている高木幸二郎監訳、『経済学批判要綱(草案) 1857-1858』(大月書店、1958年)、116-117頁の訳を引用した。
- 9) Gray, *loc. cit.*
- 10) *Ibid.*, pp.172-173. ここでも、グレイの引用英文は、MEGA, II -5, S.48. のマルクスの原文と少し違っている。従って、小論では、Karl Marx-Friedrich Engels, *Werke* (以下小論では、M - E, *Werke* と略記し、次の訳書の巻数、頁数のみ記す), Band 23 (Berlin, 1962). 『マルクス=エンゲルス全集』、第23巻 a (大月書店、1965年)、106頁から引用した。
- 11) Gray, *op. cit.*, p.173.
- 12) *Ibid.*
- 13) *Ibid.*, p.161.

- 14) 拙稿「セルツキーのマルクス批判と民主主義的社會主義」、室工大研報、No.42、122頁。
- 15) M・E, *Werke*, 第25卷 b、1051頁。
- 16) Gray, *op. cit.*, p.185.
- 17) *Ibid.*
- 18) *Ibid.*, pp.175-176.
- 19) *Ibid.*, p.180.
- 20) *Ibid.*
- 21) *Ibid.*, pp.180-181.
- 22) *Ibid.*, p.174.
- 23) *Ibid.*, p.182.
- 24) *Ibid.*, p.163.
- 25) *Ibid.*, p.178.
- 26) *Ibid.*, pp.178-179.
- 27) この点の解明は、拙稿「資本主義・社會主義・自由」、室工大研報、No.42、110-111頁参照。
- 28) M・E, *Werke*, 第17卷、319頁。但し、訳は、*MEGA*, I-22, S.143. に基づいて、少し変えた。
- 29) M・E, *Werke*, 第35卷、194頁。
- 30) M・E, *Werke*, 第23卷 a、105頁。
- 31) M・E, *Werke*, 第25卷 b、1051頁。
- 32) M・E, *Werke*, 第17卷、319-320頁。但し、訳は、*MEGA*, I-22, S.143. により変えた。
- 33) M・E, *Werke*, 第23卷 a、105頁。
- 34) 同前、104頁。
- 35) M・E, *Werke*, 第19卷、19頁。
- 36) 同前、19-20頁。
- 37) 同前、20頁。
- 38) 同前、21-22頁。
- 39) Cohen, *op. cit.*, pp.23-24.
- 40) Gray, *op. cit.*, pp.165-166.
- 41) *Ibid.*, p.163.
- 42) John Rawls, *A Theory of Justice* (Cambridge,1971). 矢島鈞次監訳、『正義論』(紀伊国屋書店、1979年)、211頁。

単文理解において精神遅滞者が示す 蓋然性ストラテジーについて

松 本 敏 治

The event probability strategy of simple sentence comprehension in mentally retarded individual

Toshiharu Matsumoto

Abstract

The purpose of this paper is to investigate the relationships between the sentence comprehension strategies and the amount of Short Term Memory (STM), and to analyze the comprehensibility of actor-patient relationships, in mentally retarded individuals. In the study of STM, 29 mentally retarded individuals, aged from 14 to 38 years old, with 27 males and 2 females, were tested. The amount of STM was measured by two procedures. The first procedure was to test for memory recall by using digits. In the second procedure, the subjects were asked to select miniature toys after the tester calls the object name. In the study of the comprehensibility of actor-patient relationships, 29 mentally retarded individuals, aged from 16 to 38 years old, with 25 males and 5 females, were tested. The subjects were asked to memorize the actor-patient relationships on a picture and to reproduce it by using miniature toys. The results from these tests were as follows : 1) the subjects who showed event probability strategy in sentence comprehension task were able to store only two items in STM; 2) most of them were able to comprehend the actor-patient relationships on a picture.

A. 序

幼児や精神遅滞者は文章理解において時に大人とは違った解釈を示す。Bever²⁾は英語を母国語とする幼児を対象に単文理解を調べ、3歳児は意味的制約を手がかりに文を理解するが、4歳児は語順を手がかりに文を理解しはじ

めることを示した。また日本語児でも、意味的制約、語順、格助詞に基づく文理解やその発達の変化が報告されている（林部⁷⁾、鈴木¹⁴⁾、岩立⁹⁾、松本¹⁰⁾）。精神遅滞者においても健常児と同様の手がかりを用いた文理解が見られる（Dewart⁵⁾、Bridges and Smith³⁾、松本敏治¹⁰⁾、松本敏治¹¹⁾、松本敏治¹²⁾）。

幼児は、加齢とともに、現実の世界についての知識やアニメシーなど非文法的手がかり（意味的制約）をもとにした文理解から語順や格助詞などの統語的情報をもとに文章の主語・対象あるいは動作主・被動作主を決定する方向に文理解の方略（ストラテジー）を変えていく。一方精神遅滞者の中には意味的制約に従った文理解の段階に長期に留まり、統語的情報を文理解に利用できないものが低いIQを示す者に多く見受けられる（松本¹⁰⁾）。

本論では、統語的情報を利用できない文理解段階にある精神遅滞者の認知的特徴を明らかにし、その欠陥の基礎となる認知メカニズムを議論する。統語的情報を文理解に利用できない被験者は、単に統語的情報が動作主・被動作主などをあらわすものであることを学習していないだけか、あるいは、単なる未学習以上に基本的な認知上の欠陥が存在しているのかを明らかにすることは精神遅滞者の教育を考える上で重要な問題である。

松本は、一定の精神遅滞者が文理解課題において蓋然性ストラテジー段階にとどまっている原因に関連した幾つかの疑問を検討してきた。検証した疑問は、つぎのものである。

1. 蓋然性ストラテジーは、文理解そのものではなく、特定の反応課題において生じる反応バイアスではないか。
2. 蓋然性ストラテジーの被験者は、語順や格助詞についての情報を保持できるか。
3. 蓋然性ストラテジーの被験者と統語的情報を利用できる被験者の間には短期記憶保持に差が存在するか。
4. 蓋然性ストラテジーの被験者は、動作主・被動作主などの概念を理解して保持する事ができるか。

B. 蓋然性ストラテジーと反応課題との関係

幼児や精神遅滞者を対象とした文理解ストラテジーの研究のうち、意味的制約が文理解に対して及ぼす影響の存在を報告している研究は反応として動作法を用い文に従ってオモチャなどを動かすことで意味理解を調べている（松本¹⁰⁾、Bever²⁾、Strohner and Nelson¹³⁾、Huttenlocher and Weiner⁸⁾、Bridges and Smith³⁾）。意味的制約についての情報は、文に登場する項目間の関係を現実的世界との照合することによって得られるが、これらの項目は上述の課題においては反応のためにオモチャ等としても提示される。そのため、意味的制約が文理解そのものではなくオモチャを動かすなどの項目の操作の段階で生じた可能性が存在する。この仮説を検証するため、松本¹²⁾は次のような実験を行った。松本が文理解課題として利用した刺激は、「ライオンがヒツジをおいかける」あるいは「トラをブタがつかまえる」などの単文であった。第一実験での課題は、読み上げられた文章に従って動物のミニチュアを動かすことであった。その反応にもとづいて被験者の文理解のストラテジーがつぎのように同定された。強い動物が弱い動物を追い掛ける蓋然性ストラテジー、第一名詞を動作主とする語順ストラテジー、格助詞「が」あるいは「を」を手がかりとして反応する格助詞ストラテジーである。第2実験の課題は提示された文に従って内容の一致する絵カードを選択する事であった。1試行において提示されるカードは2枚である。ともに一方の動物が他方の動物を追いかけている絵であるが、動作主・被動作主が入れ替わっている。選択反応をもとに、被験者の取ったストラテジーを実験1と同様に同定した。結果はつぎのことを示した。実験1で蓋然性ストラテジー、すなわち強い動物が弱い動物を追い掛ける反応が多発した被験者は、実験2では蓋然性にもとづく反応を示さなかった。しかし、実験1で語順ストラテジーおよび格助詞ストラテジーを示した被験者は、実験2においても同じストラテジーを一貫して示した。この結果は蓋然性ストラテジーが意味理解そのものではなくミニチュアを操作するという反応において独自に生じるものであり、文理解自体には特定のストラテジーが存在しないことを示

した。

C. 統語的情報の保持

動作法が蓋然性ストラテジーを生み出している原因であることが証明される一方で、絵カード法を用いた課題においてこれらの被験者がなんらの傾向も示さないことが著者の興味を引いた。彼らは、動作法においてみられたバイアスがなんら存在しない状況においても統語的な手がかりを文理解に使用することは出来なかった。このような統語的な手がかりの利用できない原因として彼らが文保持において語順や格助詞などの統語的情報を保持出来ない可能性が考えられた。そこで松本・古塚（投稿中）は、精神遅滞者を対象に文理解課題とともに文模倣課題を行い、蓋然性ストラテジーを示す被験者の文保持の特性を調べた。結果は、蓋然性ストラテジーを示す被験者でも名詞およびその語順は良く保持されていることを示した。一方格助詞、特に倒置文の格助詞の正模倣率は低い値を示した。これらの結果は、文理解に語順情報を利用できない原因が語順の保持能力の欠陥ではないことを示した。また各被験者ごとに反応を検討したところ蓋然性ストラテジーの被験者の中に正序文であれば正確に格助詞を模倣できる者も存在した。この事実は統語的情報の保持が文理解における統語的情報の利用を保証するものではないことを示唆している。要約していえば、統語的情報の保持の欠陥が文理解における統語情報利用不可の単一の原因ではない。

松本・古塚（投稿中）のモデルは文理解の過程を2つの段階に分けている。一つは、被験者は発話によって与えられた文章を自身が獲得している心的文型にしたがって保持する過程であり、もう一つはその保持された文からその被験者が理解に利用し得る情報を引きだし動作主・被動作主を決定する過程である。

このモデルによれば、文模倣における反応の差は、被験者が有している心的文型に依存している。蓋然性ストラテジーと語順ストラテジーで格助詞の正反応率には差がないが、反応文の文型に差が見られる。蓋然性ストラテジーの被

験者には、格助詞の欠落、刺激文には登場しない格助詞の出現、そして「～が～が、つかまえる」のような文法的に不正確な格助詞のペアが出現することが多い。しかし、これらの被験者でも、少なくとも「名詞・(格助詞)、名詞・(格助詞)、動詞」という心的文型は獲得している。この心的文型内の格助詞は欠落しているか、文法的に不完全なものである。それに対して語順ストラテジーで見られる格助詞の誤りのほとんどが、倒置文の格助詞「～を～が～」を正序文の格助詞「～が～を～」に置き換えるものであった。これらの被験者では、正序文の心的文型「名詞・が、名詞・を、動詞」のみを獲得しており、刺激文が正序文か倒置文であるかにかかわらず正序文の形式に変換されて保持されている。

D. 文理解方略と短期記憶の関連

加えて格助詞の保持の不全を精神遅滞者の短期記憶の側面からも検討する必要がある。精神遅滞者に短期記憶課題を与えたとき保持できる量が健常者よりすくないことは実験的にも経験的にも知られていた。これらの保持量の差は、健常者と精神遅滞者のハードウェア的な意味での欠陥によるのではなく、多くは精神遅滞者は自発的にリハーサルを行わないなどのソフトウェア的欠陥によることが示されている (Ellis⁶⁾、Brown, et al.⁴⁾。

精神遅滞者は上述のような短期記憶の保持に欠陥があるため、文理解および文模倣で名詞しか保持できないのかもしれない。松本らの一連の実験で与えられる文章は、「名詞・格助詞、名詞・格助詞、動詞」の構造を有している。それらを記憶するためには、5つ以上の情報を保持しなければならない。この内、動詞については実験中一貫しているため、あえて短期記憶に保持する必要はなく長期記憶に保持すればよいとしても、4個の情報を保持する必要がある。松本・古塚(投稿中)の文模倣課題における結果は、精神遅滞者全体を通じて名詞は比較的良く保持される一方、格助詞の再生には多くの誤りが見られることを示している。格助詞の保持に誤りを示す被験者は、乏しい短期記憶保持量の

ため名詞のみしか保持しえず、文再生時に任意の格助詞を名詞に付随して産出しているのかもしれない。

短期記憶保持量を数唱課題および動物選択課題を用いて測定し、文理解ストラテジーおよび心的文型との関係を調べた。

実験1

被験者の文理解ストラテジーを確定するため文理解課題を実施した。

方法

被験者：札幌市内の精神薄弱者施設入所者29名（男名27、女2名）、生活年齢14歳5ヵ月-38歳2ヵ月（平均28歳1ヵ月）、精神年齢3歳4ヵ月-8歳11ヵ月（平均5歳6ヵ月）IQ26-56（平均40）。

刺激文：刺激文は、3句よりなり一頭の動物が他方の動物をつかまえることを意味する24文である。登場する動物はトラ・ライオン・ヒツジ・ブタの4種である。各文は正序文・倒置文、蓋然性の高さ、でつぎの6つに分類される。文は女性によって読み上げられ、コンピュータによりデジタル録音された。

1. 蓋然性の高い正序文

- トラがブタをつかまえる。
- トラがヒツジをつかまえる。
- ライオンがブタをつかまえる。
- ライオンがヒツジをつかまえる。

2. 蓋然性の高い倒置文

- ブタをトラがつかまえる。
- ブタをライオンがつかまえる。
- ヒツジをトラがつかまえる。
- ヒツジをライオンがつかまえる。

3. 蓋然性の低い正序文

- ブタがトラをつかまえる。
- ブタがライオンをつかまえる。
- ヒツジがトラをつかまえる。

ヒツジがライオンをつかまえる。

4. 蓋然性の低い倒置文

トラをブタがつかまえる。

トラをヒツジがつかまえる。

ライオンをブタがつかまえる。

ライオンをヒツジがつかまえる。

5. 動作主と被動作主が意味的に逆転可能な正序文

ブタがヒツジをつかまえる。

ヒツジがブタをつかまえる。

ライオンがトラをつかまえる。

トラがライオンをつかまえる。

6. 動作主と被動作主が意味的に逆転可能な倒置文

ヒツジをブタがつかまえる。

ブタをヒツジがつかまえる。

ライオンをトラがつかまえる。

トラをライオンがつかまえる。

材料：被験者に提示する動物のミニチュアはトラ、ライオン、ヒツジ、ブタの4頭、大きさは4.5センチから8センチ、相対的大きさは実物の動物に対応している。

手続き

実際は被験者が所属する精神薄弱者施設の1室でおこなった。実験者は机をはさんで向かいあってすわり、4つのミニチュアを提示した。動物名についての知識をポインティングにて確認した。練習課題実行後、実験者は被験者の前に遮蔽板を置き、その後ろに4頭の動物のミニチュアを配置する。各動物の配置は試行ごとに变化した。実験者は、遮蔽板を外し文を提示した後、被験者の反応を待つ。被験者の課題は文章に従って4頭の動物の中から2頭を選択し動かすことであった。試行は1文1試行の24試行であった。刺激文はコンピュータによるDA変換で再生された。提示速度は2秒に1句である。

結果

つぎのような基準で被験者を分類した。動物の強弱が明白な蓋然性の高い文と蓋然性の低い文16試行中12試行以上で強い動物が動作主になる反応を示した被験者を蓋然性ストラテジー群とする。24試行中18試行以上で特定の語順位置にある動物を動作主とした被験者を語順ストラテジー群とした。また18試行以上で文の意味どおり正しく反応した被験者を格助詞ストラテジー群とした。ただし動物の選択に誤りを示した被験者には以下の基準を用いた。すなわち動物の選択に正反応した試行の内5%水準で各ストラテジーの反応がチャンスレベルを超える場合を各ストラテジーの該当者とした。

蓋然性ストラテジー 5名、語順ストラテジー 8名、格助詞ストラテジー 6名、分類不可 9名であった。

実験 2

文理解ストラテジーごとの文模倣の特性を調査する。

方法

刺激文

ライオンがヒツジをつかまえる。

ブタがヒツジをつかまえる。

トラをライオンがつかまえる。

ブタをトラがつかまえる。

トラがライオンをつかまえる。

ライオンをヒツジがつかまえる。

ブタをヒツジがつかまえる。

ブタがトラをつかまえる。

手続き

はじめに「これからお話をしますから真似っこしてください」といって練習課題を行った。練習課題は WPSI の文模倣の練習課題と同じ「ぼく（わたし）のうち」「ウマは大きい」「僕ら（わたしたち）は夜ねる」である。

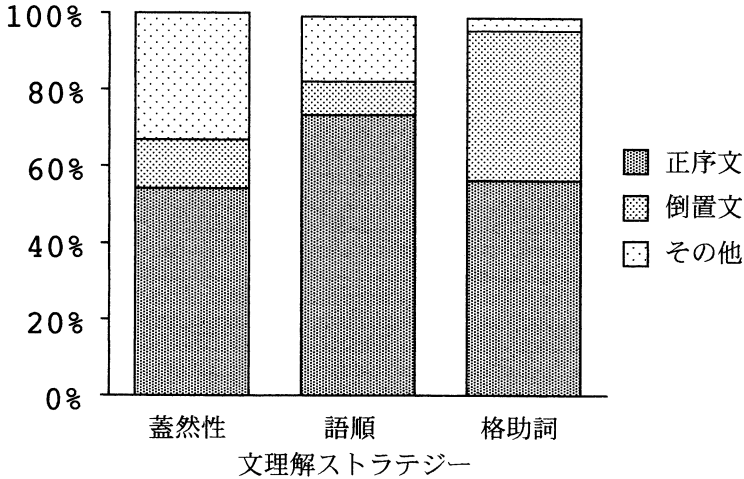


Fig. 1 文模倣課題における反応文の文型

結果

文理解課題において意味ストラテジーを示した2名および格助詞ストラテジーを示した2名は、言語反応が乏しく実験を本実験を実施できず分析から除いた。

被験者の反応をビデオレコーダーで記録し、反応文の文型を次のように分類した。正序文：(名詞・が、名詞・を、動詞)。倒置文：(名詞・を、名詞・が、動詞)。その他：(正序文、倒置文以外の反応)。各文理解ストラテジー群ごとに全反応中に出現した正序文、倒置文、その他の文型の割合を Fig. 1 に示した。正序文の出現率は蓋然性ストラテジー群および格助詞ストラテジー群で50%程度であるのに比較して、語順ストラテジー群では73%という高い値を示した。しかし分散分析による結果からは群間の有意な差は認められなかった。倒置文は蓋然性ストラテジー群13%、語順ストラテジー群9%、格助詞ストラテジー群33%であった。倒置文の出現に関して3群を対象に行った分散分析の結果は有意であった ($F(2,15)=5.50, p < .05$) ことから、Tukey法を用いて多重比較を行なった。語順ストラテジー群と格助詞ストラテジー群との差が有意で

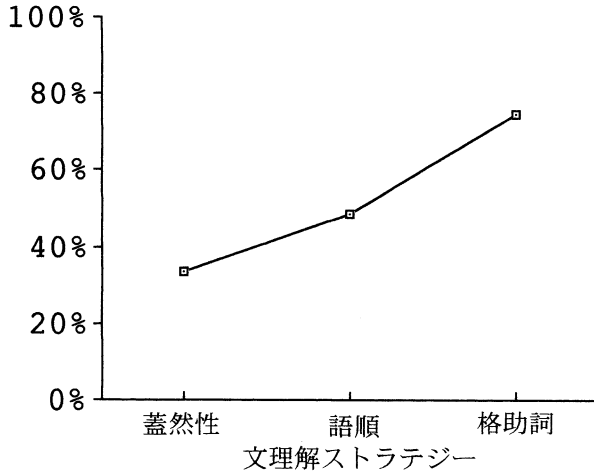


Fig. 2 文模倣課題における正模倣率

あった。(p < .05)。その他の文の出現率は、蓋然性ストラテジー群33%、語順ストラテジー群17%、格助詞ストラテジー群3%である。3群を対象に行なった分散分析によれば、群間に有意な差は認められなかった。

各文理解ストラテジー群の、正模倣率を Fig. 2 に示した。蓋然性ストラテジー群33%、語順ストラテジー群48%、格助詞ストラテジー群75%であった。分散分析の結果は有意であった (F (2,15) = 4.34, p < .05) ことから、Tukey 法による多重比較を行なった。蓋然性ストラテジー群と格助詞ストラテジー群の間に有意な差が認められた (p < .05)。

実験 3

文理解ストラテジー群のもつ短期記憶スパンを測定する。

方法

a. 動物選択課題

刺激材料：トラ、ライオン、ブタ、ヒツジ、イヌのミニチュア

提示文

1 項目

ブタ

イヌ

トラ

ヒツジ

ライオン

2 項目

ブタ、イヌ

トラ、ヒツジ

ライオン、ブタ

イヌ、トラ

ヒツジ、ライオン

3 項目

ライオン、ブタ、ヒツジ

トラ、イヌ、ライオン

ヒツジ、トラ、イヌ

ブタ、ライオン、トラ

イヌ、ヒツジ、ブタ

4 項目

ヒツジ、ライオン、ブタ、イヌ

イヌ、ブタ、ライオン、トラ

ライオン、ヒツジ、トラ、ブタ

ブタ、トラ、イヌ、ヒツジ

トラ、イヌ、ヒツジ、ライオン

手続き

練習：動物を5体被験者の前におき、「これから動物の名前を言いますから、その動物を(手渡して)下さい」と言い、実験者は手を上にむける。「ライオン」と読みあげ、被験者の反応を待つ。練習後本実験に移行した。

本実験：遮蔽板を立てた後に、ミニチュアを5体配置。配置は試行毎に変化。動物の名前を言い終わった後に遮蔽板を取り外す。動物の名前は2秒に1語の割合で読み上げる。試行は1項目、2項目、3項目、4項目の順序で行った。

b. 数唱問題

刺激：数字を利用した項目の確定、知能テストに従う。WISCより抜粋、提示順序は下の表の通り。1秒に1語ずつ提示。

2-5

6-3

5-7-4

2-5-9

7-2-9-6

8-4-9-3

4-1-3-5-7

9-7-8-5-2

1-6-5-2-9-8

3-6-7-1-9-4

8-5-9-2-3-4-2

4-5-7-9-2-8-1

6-9-1-6-3-2-5-8

3-1-7-9-5-4-8-2

手続き

次のように指示した。「これから数字を言います。言い終わったら、『はい』といますから、真似してください」。数字を読み上げる。同一項目数の課題は2試行であり、次第に項目数を増やしていく。同一項目数の課題2試行とも失敗した場合、その時点で課題を終了した。

結果

実験1に参加した被験者のうち分類不可1名、蓋然性ストラテジー1名、格助詞ストラテジー1名は数唱課題を行なえず、数唱課題の分析からは除いた。

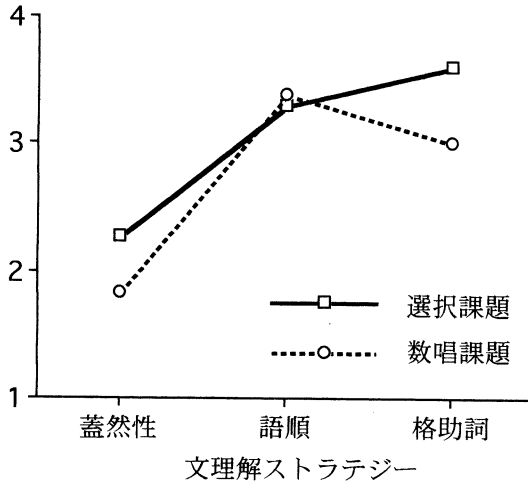


Fig. 3 選択課題、数唱課題での短期記憶保持量

動物選択では、要求したすべてのミニチュアを過不足なく手渡した場合に正答とした。順序は問わなかった。各被験者ごとに、正答数を求めた。

数唱問題では、順序ともに正確に再生できた時に正答とした。各被験者ごとに、正答数を求めた。

数唱課題と選択課題の結果から短期記憶の保持量を次のようにして求めた。数唱課題では正答数を各項目ごとの試行数である2でわり、1を加えた。選択課題では正答数を各項目ごとの試行数5で割った。動物選択課題および数唱課題での蓋然性ストラテジー群、語順ストラテジー群、格助詞ストラテジー群の反応を Fig. 3 に示した。

選択課題の結果について、分散分析を行いストラテジー群間の差を検討したところ有意であった ($F(2,16) = 17.51, p < .01$)。そこで、Tukey法を用いて多重比較をおこなった。蓋然性ストラテジー群の被験者が他の被験者に比して有意に少ない記憶保持量を示した ($p < .05$)。

数唱課題の結果についても、分散分析を行ってストラテジー群間の差を検討したところ差は有意であった ($F(2,18) = 18.75, p < .01$)。そこで Tukey

法を用いて多重比較を行った。蓋然性ストラテジー群の被験者は他の被験者に比して記憶保持量が少ないことが示された ($p < .05$)。

短期記憶保持量と文模倣の正当率の相関を求めたところ、数唱課題と正模倣率では.56、選択課題と正模倣率の間には.53でありともに有意な相関がみられた (Table 1)。

Table 1 文模倣正答率と短期記憶保持量の相関

	正模倣	数唱課題	選択課題
正模倣	1.0000	.5588*	.5331*
数唱課題	.5588*	1.0000	.6995**
選択課題	.5331*	.6995**	1.0000

* - Signif. LE .05 ** - Signif. LE .01 (2-tailed)

考察

この結果は、文理解において蓋然性ストラテジーを示す被験者は、他のより発達的に進んだ統語的情報を利用した文理解を示す被験者に比べて短期記憶保持量が少ないことを示した。動物選択問題では、彼らが保持し正確に選択できるのは平均2頭までであった。また短期記憶保持量と文の正模倣率に正の相関があったことは、文模倣過程における短期記憶の役割を確認したこととなる。

しかし、詳しく見てみるとストラテジー群間での短期記憶保持量と文の模倣率の変化には若干の差がある。短期記憶保持量は蓋然性ストラテジー群と語順ストラテジー群で大きな差を示すが、文保持の正当率では蓋然性ストラテジー群と語順ストラテジー群の差はそれほど大きなものではない。しかし、蓋然性ストラテジー群と語順ストラテジーでは被験者が反応において示した文型に顕著な差が存在する。蓋然性ストラテジー群では格助詞の欠落したり文法的に正しくない格助詞が出現するなどの反応がみられるが、語順ストラテジー群では正序文が多発する。このことは語順ストラテジーを示す被験者は松本・古塚(投稿中)が述べているように自らの心的文型に従って変換された文を保持しており置き換えられた格助詞の保持にも短期記憶が使用されているのかもしれない。

しかし短期記憶が Atkinson and Shiffrin¹⁾の言うように作業記憶と同じであるなら、短期記憶保持量の乏しさは、作業記憶を必要とする処理の不利益を意味する。蓋然性ストラテジーの被験者は文模倣において名詞とその語順を比較的正確に保持できていたが、保持された文から統語的情報を引き出し動作主・被動作主を確定する一連の処理のために作業記憶が使用出来ないのかもしれない。

E. 概念の保持

松本は一連の研究により蓋然性ストラテジーが文理解そのものによって生じる反応ではないことを明らかにし、蓋然性ストラテジーを示す被験者は文自体から動作主・被動作主を決定する手掛かりをなんら獲得できないとした。これにたいして、蓋然性ストラテジーを示す被験者は基本的に低い発達段階にある(松本¹⁰⁾)ことから、動作主・被動作主の関係概念自体を保持できないのではないかとの疑問が生じた。そこで、絵カードを使い視覚的に動作主・被動作主関係を提示した場合の被験者の反応を調べた。

実験 5

方法

被験者：札幌市内の精神薄弱者施設入所者29名(男25名、女4名)、生活年齢16歳5ヵ月-38歳0ヵ月(平均27歳5ヵ月)、精神年齢3歳2ヵ月-11歳11ヵ月(平均6歳4ヵ月)IQ20-74(平均40)。

a. 文理解課題

材料：実験1に同じ

手続き

ほぼ実験1に同じであるが、次の点異なる。文章提示中被験者とのミニチュアの間に透明のセルロイド板がおかれた。被験者は文提示中ミニチュアを見ることは出来たが、触れえなかった。文章提示後、セルロイド板が除かれ反応が促された。

b. 絵カード理解課題

材料：実験5と同じミニチュアと絵カード。絵カードには2頭の動物が描かれ、一方の動物が他方の動物に飛びかかっている。絵はB5版の厚紙にはりつけてある。描かれる動物は、ライオン、トラ、ヒツジ、ブタ。大きさはミニチュアと同じ。動物の組み合わせは6通り、各々動作主と被動作主が入れ替わり、それぞれについて動作主の位置が左右入れ替わる。

ライオン→トラ

ライオン←トラ

トラ→ライオン

トラ←ライオン

ライオン→ヒツジ

ライオン←ヒツジ

ヒツジ→ライオン

ヒツジ←ライオン

ライオン→ブタ

ライオン←ブタ

ブタ→ライオン

ブタ←ライオン

トラ→ヒツジ

トラ←ヒツジ

ヒツジ→トラ

ヒツジ←トラ

トラ→ブタ

トラ←ブタ

ブタ→トラ

ブタ←トラ

ヒツジ→ブタ

ヒツジ←ブタ

ブタ→ヒツジ

ブタ←ヒツジ

手続き

ミニチュアの動物の名前について知識を確認するため、ミニチュアおよび絵カードを提示しポインティングを行なわせた。確認の後、練習課題を行う。被験者の前にライオンとヒツジのミニチュアを頭部を被験者に向けて平行に配置する。実験者は「これから絵が出ますから、その絵の通りに動物を動かしてください」と指示し、『ライオン→ヒツジ』の絵を提示しミニチュアをうごかすよう被験者に促す。この時被験者は絵を見ながらミニチュアを動かすことが出来る。この練習がうまく行えた場合に、本試行へ移行する。課題を理解していない場合は、再度指示しなおし練習を行う。

本試行では、実験者は絵カードに不透明のカバーを付けて被験者の正面に置く。実験者は、被験者から見えないように絵カードの後ろに4頭のミニチュアを被験者に頭を向け平行に配置する。カバーを取り除き、絵カードを5秒間提示する。その後、絵カードを取り除き、反応を促す。

結果

条件1の反応をもとに、実験1と同じ基準を用いて被験者の文理解ストラテジーを確定した。蓋然性ストラテジー群6名、語順ストラテジー群8名、格助詞ストラテジー群6名、分類不可群9名であった。

反応は次の2つの側面から分析された。1つは文あるいは絵の内容に従って正しく動作主・被動作主が選ばれているか、もう一つは動物の強弱に従った蓋然性反応である。

動物が追いかける方向が文あるいは絵と一致していなくとも、ミニチュアの動作主・被動作主が文あるいは絵の動作主・被動作主と一致している場合は正解とした。両課題とも反応中、動物の選択に誤りがある試行を除外した後の各被験者の正反応率および蓋然性反応率をもとに分析を行なった。両課題での文理解ストラテジー群ごとの正答率を Fig. 4 に示した。文章理解課題での正答率は蓋然性ストラテジー群59%、語順ストラテジー群53%、格助詞ストラテジー

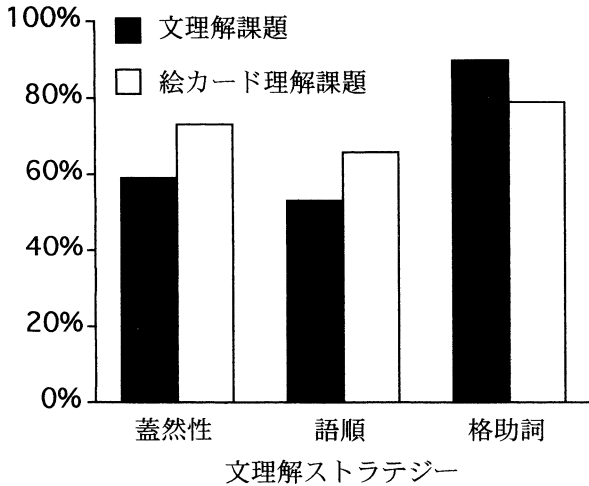


Fig. 4 文理解課題および絵カード理解課題における正答率

群90%であった。3群について分散分析を行なったところ有意であった ($F(2,19)=42.52, p < .01$) ことから、Tukey 法による多重比較をおこなった。格助詞ストラテジー群が他のストラテジー群より有意に高い正反応率を示した ($p < .05$)。絵カード理解課題では蓋然性ストラテジー群73%、語順ストラテジー群66%、格助詞ストラテジー群79%の正答率を示し有意な差は認められない。蓋然性ストラテジー群および語順ストラテジー群では、文理解課題での正答率を上回った。文理解課題と絵カード理解課題の正反応率について各ストラテジーごとにt検定を行った。蓋然性ストラテジー群ではその差は有意であった ($t=2.58, df=5, p < .05$)。

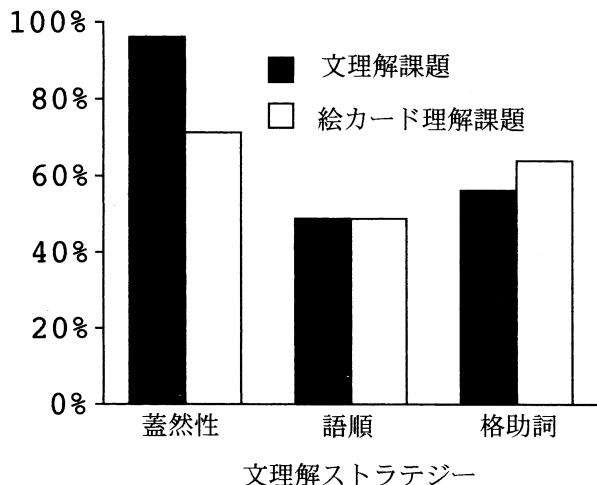


Fig. 5 文理解課題および絵カード理解課題における蓋然性反応率

両課題での蓋然性にもとづく反応を Fig. 5 に示した。文理解課題では、蓋然性ストラテジー96%、語順ストラテジー49%、格助詞ストラテジー56%であった。3群について分散分析を行ったところ有意であった ($F(2,19) = 40.53, p < .01$) ことから、Tukey 法による多重比較を行った。蓋然性ストラテジー群が他のストラテジー群に比して有意に高い蓋然性反応を示した ($p < .05$)。絵カード理解課題では、蓋然性ストラテジー71%、語順ストラテジー49%、蓋然性ストラテジー64%であった。蓋然性ストラテジー群の被験者が、カード理解課題においてももっとも高い蓋然性反応を示すものの、他のストラテジー群との差は有意ではなかった。また、その蓋然性反応率は蓋然性ストラテジー群が文理解課題において示した蓋然性反応よりも有意に低い値 ($t = 3.18, t = 5, p < .05$) を示した。

また、各被験者を絵カード理解課題の結果をもとにづきのように分類した。動物の選択が正しくできた反応中、動作主・被動作主が絵カードの内容と一致する試行がチャンスレベルを有意に超えて ($p < .05$) 多発した場合、その被験者は正反応が優位な被験者とした。また動物の選択が正しく行えた反応中、

強弱関係が明白な試行で、強い動物が弱い動物を追いかける反応が有意に多発した場合は、蓋然性反応が優位な被験者とした。文理解において蓋然性ストラテジーを示した被験者6名のうち、絵カード理解課題においても蓋然性反応を優位に示したものは2名のみである。他の4名は正反応を優位に示した (Table 2)

Table 2 絵カード理解課題における被験者の反応

文理解ストラテジー	蓋然性反応	正反応	分類不可
蓋然性	3	4	2
語順	2	4	0
格助詞	2	3	1

これらの結果は、次のようにまとめられる。絵カード理解課題では、文理解ストラテジー群間では差がない。蓋然性ストラテジー群は、文理解課題に比して有意に高い正反応率を絵カード理解課題において示した。また蓋然性反応の出現率も群間での差はない。蓋然性ストラテジー群は、文理解課題に比して有意に低い蓋然性反応を絵カード理解課題において示した。また各被験者ごとの絵カード理解課題の反応をみても蓋然性ストラテジーの被験者の内2/3が正反応をしめし、1/3のみが蓋然性反応を優位に示している。

考察

松本¹²⁾は、文理解における蓋然性ストラテジーが文理解そのものではなく、ミニチュア操作において生じると結論している。しかしながら、絵カード理解課題の結果は、命題（動作主・被動作主の関係）が文章ではなく絵として提示された場合には、ミニチュア操作課題であっても正確に表現することが可能であることを表している。このことは、蓋然性ストラテジーとは文理解において動作主・被動作主を確定することが出来ないために生じる反応であることを意味している。蓋然性ストラテジーの被験者は、文章から名詞についての情報を引き出すことはできるが、統語的情報にもとづいて動作主・被動作主を決定することは出来ない。しかし、文理解において蓋然性ストラテジーをしめす被験

者の中には、絵カード内の動作主・被動作主関係を理解できるものも存在する。一方、格助詞ストラテジーの被験者の中にも、絵カード理解課題において蓋然性反応を示す者もいる。これは、被験者が情報を取り出す最適モダリティが被験者ごとに異なっていることを示している。

F. まとめ

精神遅滞者の文理解について行なった一連の研究から、意味的制約に依存した反応を行なう被験者の認知的メカニズムおよびその認知特性のいくつかが明らかとなった。文理解において見られる蓋然性にもとづく判断は、文理解そのものの過程で生じるのではなくミニチュアを用いて反応を行なわせるなどの動作法による反応過程において生じている。文理解そのものには特定の反応傾向は認められない。また、文模倣の結果からは、名詞およびその語順はよく保持されるが格助詞は文保持の過程で欠落する。このような文保持における格助詞の欠落は短期記憶保持量の少なさによっていると考えられる。また蓋然性ストラテジーを示す被験者は、動作主・被動作主の概念を一般的に保持できないわけではないことが明らかとされた。

引用文献

- 1) Atkinson,R.C. and Shiffrin,R.M. : Human memory : A proposed system and its control process. In Spence,K.W. and Spence,J.T. (Eds). The psychology of learning and motivation : Advances in research and theory 89-195 (Academic Press 1968)
- 2) Bever,T.G. : The cognitive basis for linguistic structures. In Hayes,J.R. (Eds). Cognitive and Development of Language 297-352 (John Willey & Sons 1970)
- 3) Bridges,A. and Smith,J.V.E. : Syntactic comprehension in Down's Syndrome children British Journal of Psychology 75, 187-196 (1984)
- 4) Brown,A.L., Campione,J.C., Bray,N.W. and Wilcox,B.L. : Keeping track of changing variables : Effects of rehearsal training and rehearsal prevention in normal and retarded adolescents. Journal of Experimental Psychology 10, 1973)
- 5) Dewart,M.H. : Language comprehension processes of mentally retarded children American

- Journal of Mental Deficiency 84, 177-183 (1979)
- 6) Ellis, N.R. : Memory processes in retardates and normals. (Academic Press 1970)
 - 7) 林部英雄：知覚のストラテジーの実験的研究 言葉の発達とその障害（村井潤一，飯高京子，若葉陽子 and 林部英雄編）、99-108（第一法規、1976）
 - 8) Huttenlocher, J. and Weiner, S.L. : Comprehension of instructions in varying contexts *Cognitive Psychology* 2, 369-385 (1971)
 - 9) 岩立志津夫：日本語児における語順・格ストラテジーについて *心理学研究* 51, 233-240 (1980)
 - 10) 松本敏治：精神遅滞児の文章理解におけるストラテジーの研究 *北海道大学教育学部紀要* 48, 207-227 (1986)
 - 11) 松本敏治：精神遅滞児の単文理解における視点の効果 *稚内北星学園短期大学紀要* 2, 1-17 (1989)
 - 12) 松本敏治：精神遅滞者の単文処理過程について *教育心理学研究* 37, 117-125 (1989)
 - 13) Strohner, H. and Nelson, K.E. : The young child's development of sentence comprehension : influence of event probability, nonverbal context, syntactic form, and strategies *Child Development* 45, 567-576 (1974)
 - 14) 鈴木情一：日本の幼児における語順方略 *教育心理学研究* 25, 200-205 (1977)

〈-san⁴〉の意味論：1つの形式と 複数の意味の対応について

橋本邦彦

SEMANTICS OF 〈-san⁴〉 : ON THE CORRESPONDENCE BETWEEN ONE FORM AND MULTIPLE MEANINGS

Kunihiko Hashimoto

Abstract

The Mongolian suffix 〈-san⁴〉 is said to indicate perfectivity of an event but, actually, expresses various meanings depending on contexts. This paper begins by classifying the meanings as closely as possible. Through the classification we can find out the core meaning of the suffix which is shared by its multiple meanings. 〈-san⁴〉 gathers them around the core as a motivating element and constructs a semantic network. Our conclusion is that the form of 〈-san⁴〉 corresponds to the network. As many cognitive linguists, such as Lakoff and Johnson (1980), Lakoff (1987) and Langacker (1987, 1991), have claimed, one form corresponds to one semantic network, but not one meaning. The network consists of a central meaning or a prototype, less central meanings or nonprototypes and a motivating element of their connection. The semantics of 〈-san⁴〉 proves the adequacy of the correspondence concretely and positively.

1. 序 論

形式と意味とが1対1で対応していたとしたら、言語はずっと明晰であったに違いない。曖昧性も多義性もなく、誤解の余地のない伝達が可能であっただ

ろう。けれども、残念ながら、形式と意味との間には、1対1の対応関係は、専門的な術語のような特殊な場合を除いて、成立しないことが多い。

言語を観察してみると、1つの形式が複数の意味をもつ事例に行き当たる。

(1) a. I *took* her arm and led her to a chair.

(= get hold of something with one or both hands)

b. Will you *take* me to your father ?

(= move or guide someone / something from one place to another)

c. Our army has *taken* 1000 prisoners.

(= get someone by force)

d. This machine *takes* 10p coins.

(= use)

e. If you'll *take* my advice, you'll apologize.

(= accept)

5つの文は、英語の動詞〈take〉の他動詞の用法であり、等しく目的語名詞句をとっているが、意味は異なっている。(1 a)は「(手を用いて何かを)つかむ」ことを、(1 b)は「(誰かをある場所から別の場所へ)連れて行く」ことを、(1 c)は「(力づくで誰かを)捕らえる」ことを、(1 d)は「(何かを)用いる」ことを、(1 e)は「(忠告などを)受け入れる」ことを意味する。

反対に、複数の形式が1つの意味を共有する例も存在する。

(2) a. He *died* (of cancer / for his country).

b. He *passed away* (peacefully).

c. He *kicked the bucket* (in a ridiculous way).

d. He *was killed* (in a traffic accident).

(2 a)の〈die〉はもっとも一般的に用いられる形、(2 b)の〈pass away〉は婉曲的な表現、(2 c)の〈kick the bucket〉は滑稽さを含意する俗語っぽいイディオム、(2 d)の〈be killed〉は交通事故や戦争など外的な要因の影響を暗示するが、使用域やニュアンスの違いを超えて、「死ぬ」という意味を中核の部分で共有し合ってる。

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

一つの形式と複数の意味、あるいは複数の形式と1つの意味のような1対多の対応は、英語だけに特有のものではなく、世界中の言語に広く見られる事実であるように思われる。

モンゴル語（ハルハ方言）には、動詞語幹に付いてアスペクト的な意味を表示する接尾辞〈- san⁴〉があるが¹⁾、この接尾辞は、1つの形式と複数の意味の対応関係の典型例に数えることができる。

Poppe (1951) は〈- san⁴〉の意味を「完成／実現した行為 (vollzogene Handlung)」、「完結／終了した行為 (abgeschlossene Handlung)」であると述べている。これにほぼ準じた説明は、Sanzheyev (1973)、Luvsanjav et al (1976)、Vietze (1978)、小沢 (1986) 等でも施されており、完了のアスペクト接尾辞であると定義することができる。

〈- san⁴〉は、形態上は、動詞を名詞化し、Binnick (1979) では「動名詞」接尾辞、Luvsanjav et al (1976) では「時制名詞」接尾辞と呼ばれている。動詞語幹がこの接尾辞をとると、純粋な名詞とまったく同じ活用をする。

(3)

	a. sar (月)	b. av -(とる)+- san
主 格	sar	avsan
属 格	sariyn	avsniiy
与 位 格	sard	avsand
対 格	sariyg	avsniiyg
奪 格	saraas	avснаас
具 格	saraar	avснаар
共 同 格	sartay	avsantay

(3 a) は普通名詞、(3 b) は動詞語幹に〈- san⁴〉の付いた動名詞形であるが、同じ仕方で格接尾辞をとっている。

名詞と動名詞形との並行性は、形態上の特徴にとどまらない。文における出

現の位置も並行している。Binnick (1979) も指摘しているように、〈- san⁴〉に導かれる動名詞句は、名詞句の現れ得る場所ならどこにでも現れることができる。もっと具体的に言うと、主語、目的語、後置詞の目的語、述語、修飾語、副詞句、同格句、否定辞〈- güy〉の前、疑問小辞〈- uu / - üü〉の前などである。

出現の位置の多様性は、実は、機能の多様性を生じさせ、機能の多様性は、結局、意味の多様性を生じさせるに至るのである。確かに、〈- san⁴〉は完了的なアスペクトを表すが、実際の使用の現場では、これだけでは説明しきれない用例が豊富に存在しているのであって、それこそ一筋縄では処理しきれないと言ってよい。

以下の考察では、まず〈- san⁴〉の様々な意味を担う具体的な言語資料を分類整理することから始める。次いで、それらの意味・概念構造を解明する。この構造を通して、一見多様性に富んだ〈- san⁴〉の意味も、核心の部分では、たった一つの意味に還元できることが明らかになる。この核心の意味に動機づけられて、〈- san⁴〉の様々な意味がプロトタイプの意味を中心にして関連づけられ、意味のネットワークといったものを構成していると考えるのである。

そこで、本稿の目的は、次のようになる。

- 1) 分類整理した言語資料から、核心となる意味の正体をつきとめる。
- 2) この核心の意味を、言語的環境の中で出現する複数の意味が、どのように共有し合いながら関連づけられているのか、有契化 (motivation) の仕方の実体を明らかにする。
- 3) 1) と 2) から、1つの形式は1つの意味のネットワークに対応することを証明する。

2. 時間的先行性

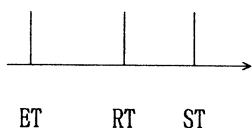
時間が、その性質上、二次元的な広がりを見せるのであれば、時間の軸というようなものを設定するのが都合がよい。Reichenbach (1947) は、常に右端

〈-san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

に向かって拡張していく軸上に、後に多くの研究者によって度々引用されることになる3つの時点を配置することで、すべてのテンス、アスペクトを図示して見せた。

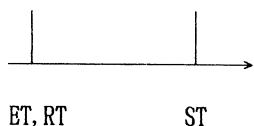
(4) Reichenbachのテンス/ アスペクトの図

a. 過去完了(Past Perfect):



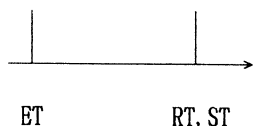
e. g. I had seen John.

b. 過去時(Past):



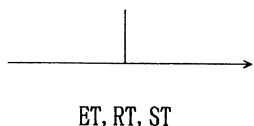
e. g. I saw John.

c. 現在完了(Present Perfect):



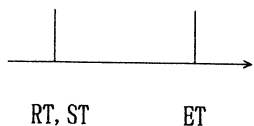
e. g. I have seen John.

d. 現在時(Present):



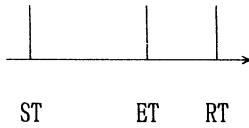
e. g. I see John.

e. 未来時(Future):



e. g. I shall see John.

f. 未来完了(Future Perfect):



e. g. I shall have seen John.

- ☆ ET (Event Time) : 事態の時間
 RT (Reference Time) : 指示の時間
 ST (Speech Time) : 発話の時間

上記3つの時間は、互いに独立したステイタスを有し、時間軸上で相対的な位置を占める。「私がジョンに会う」事態が、3つの時点の先行性や同時性の組合せで、6つの異なる形式に言語化されるのである。

Reichenbach の言語化された時間表示の図式は、色々なところで採り上げられ検討されてきたが（例えば、Comrie (1985)、Dahl (1985)、Binnick (1991) 等参照）、細部に関しては議論の余地はあるにせよ、概ねよくできた装置であるように思われる。本節では、必要な場合には手を加えつつ、この装置を利用して頂くことにする。

2. 1. 完了表示

第1節で、〈-san⁴〉はアスペク的な意味を表す接尾辞であると紹介した。アスペクトとは、事態がどのように見られるのかを、時間の側面から表す形式である。「どのように見られるか」が問題になると、当然、話者の視点が関与する。Comrie (1976)、Binnick (1991)、Smith (1991) などによれば、次の2つの視点とそれに関連したアスペクトの存在が認められている。

- (5) a. 始発点 (an initial point) と終端点 (a final point) を含む事態全体に焦点を当てる場合、完了的アスペクト (perfective aspect) をもつという。⇨閉じた視点 (a closed viewpoint)

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

- b. 始発点も終端点も含まず、事態の内部の一部にだけ焦点を当てる場合、未完了的アスペクト (imperfective aspect) をもつという。

⇒開いた視点 (an open viewpoint)

英語の文から典型的な例文を記す。

(6) a. I have walked (before).

b. I am walking (now).

(6 a) は現在完了形の文で、「歩く」行為はすでに完了していることを示す閉じた視点をもっている。(6 b) は現在進行形の文で、「歩く」行為を内部から捉えている未完了的な開いた視点をもっている。

完了的なアスペクトにのみ着目すると、(7) のような特徴をあげることができる。

(7) a. 事態の時間は指示／発話の時間に先行する。

b. 事態の時間から指示／発話の時間までまたがる時間の広がりを示す。

c. 事態の結果として生じる静態的な視点をもつ。

(7 a) の時間の先行性だけでは、(4 a, b, c) に見るように、完了的アスペクトと過去時とを区別することはできない。(7 b) により、過去時のようなテンスが時間を時間軸上に点として位置づけるのに対して、アスペクトは時間を面として捉えることがわかる。(7 c) により、事態の時間が、特に、指示の時間との間で関連性を示すことが明記されている。

〈- san⁴〉が完了的アスペクトの言語形式であるとする、(7) の特徴を余す所なく内在化させているはずである。そこで、〈- san⁴〉がプロトタイプの完了性を意味する例を観察していくことにする。

最初に、過去のある時点を指示の時間として、それより以前に事態が完了してしまっていることを示す用法を採り上げる。

(8) a. Dorjiy untaxad 12 tsagaas 5 minut öngörch bayjee.

ドルジ-[対] 寝る-[時] 時-[奪] 分 過ぎる-[連] いる-[過]

(ドルジが寝た時、12時を5分過ぎていました。)

b. Dorjiyг untaxad 12 tsagaas 5 minut öngörsön bayjee.

過ぎる-[完]

(ドルジが寝た時には、12時を5分過ぎてしていました。)

(9) a. Namayг xarixad düü xooloo idej baylaa.

私-[対] 帰る-[時] 弟 食事-[再] 食べる-[連] いる-[過]

(私が帰宅した時、弟は食事をしていました。)

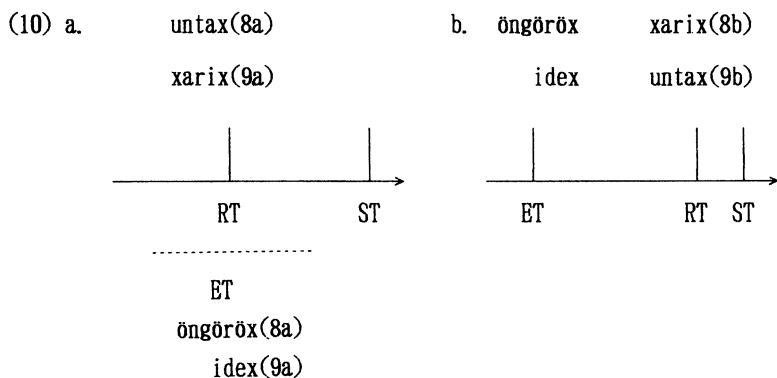
b. Namayг xarixad düü xooloo idsen baylaa.

食べる-[完]

(私が帰宅した時には、弟は食事をしてしていました。)

(8)、(9)の各文は、時点の副動詞形〈-xad⁴〉に導かれている。²⁾(8 a)、(9 a)では、副詞節の行為をする時点が主節の描く継続的な事態の内に位置づけられる未完了的なアスペクトを示している。一方、(8 b)、(9 b)の主節述語に〈-san⁴〉のある文では、副詞節の行為の起こる時点より以前に主節の事態が済んでしまっていることを示している。

(8)、(9)を図示すると、次のようになる。



主節の述語〈bay-〉に現在形の〈-na⁴〉が付くと、過去時において完了した事態の結果の現在時までの存続を表すことができる。

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

- (11) a. Tanay suux sandal deer xüüxdüüd nom
あなた-[属] すわる-[非過] いす に 子供-[グ] 本
tavisan bayna.
置く-[完] いる-[現]

(あなたのすわる椅子に、子供たちが本を置いてしまっています。)

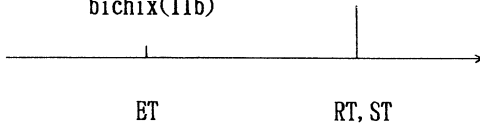
- b. “Ulaanbaatar xotod olon üyldver surguuli
ウランバートル 市-[与位] たくさんの 工場 学校
baydag” gej ene nomd bichsen bayna.
ある-[習] [引] この 本-[与位] 書く-[完] いる-[現]

(「ウランバートル市には、たくさんの工場や学校がある」とこの本に書いてあります。)

(11a) の「本を置く」行為は、過去のある時点でなされてしまっており、その結果、指示／発話の時点でその本が椅子の上にあるのである。(11b) のウランバートル市についての記述も、過去時に完了した行為であり、その結果として指示／発話の時点である現在時に当該の記述を読めるわけである。

(12) tavix(11a)

bichix(11b)



〈- san⁴〉が過去時の経験を表す例も存在する。

- (13) a. Bi taniyg duuj baysan.
私-[主] あなた-[対] 聞く-[連] いる-[完]
(私はあなたのことをお聞きしています。)

b. Taniy aldar sayxan neriy tani nom xevleels

あなた-[属] 評判 りっぱな 名前-[対] [2所] 印刷物-[奪]

olon üzsen.

何度も 見る-[完]

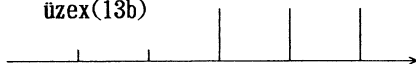
(あなたのお名前は (lit. あなたの評判とりっぱなお名前は) 本で何度も
拝見しました。)

(13a, b) は、「聞く」こと「見る」ことを過去時において経験しており、
その経験が現在時に至っても存続していることを意味している。継続を示す

(13a) の連結の副動詞形 <-j>、頻度を示す (13b) の副詞 <olon> が、その
ことを明示している。

(14) duux(13a)

üzex(13b)



ET₀ ET₁ ET₂ ET_n RT, ST

否定の領域で <-san⁴> の完了性が顕著に現れる場合がある。

(15) a. Bagsh nadad nom ögöögüy devter ögsön.

先生 私-[与位] 本 与える-[未完]-[否] ノート 与える-[完]

(先生は私に本はくれませんが、ノートはくれました。)

b. A : Ta ene nomiyg unshsan uu?

あなた-[主] この 本-[対] 読む-[完] [疑]

(あなたはこの本をお読みになりましたか。)

B : Bi ene nomiyg unshix ni baytugay,

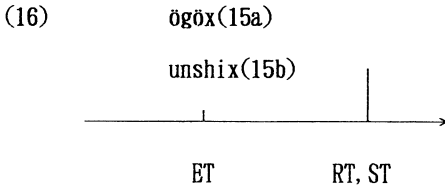
私-[主] 読む-[非過] [3所] ないばかりか

üzee chi güy.

見る-[未完] さえも [否]

(私はこの本を読んだことがないばかりか、見たことさえありません。)

(15a) は、否定表現と肯定表現で意味上の対比を際立たせており、未完了形 〈- aa⁴〉と完了形 〈- san⁴〉とがそれに一役買っている。(15b) は質問と応答からなる談話である。B の動詞の形に注目すると、これは 〈baytugay, ~chi güy〉という否定の連結形に包み込まれているのが、〈üz -〉は未完了形 〈- aa⁴〉を従えていて、それによって A の 〈- san⁴〉との間に意味上の対比が生じてくるのである。



以上の観察から、〈- san⁴〉の意味には、指示／発話の時間からの事態の時間の先行性と事態の時間の指示／発話の時間との関連性が共通の特徴とすることがわかる。(8 b)、(9 b) での指示の時間は、過去時の指定された一点である。(11)、(13)、(15) では、指示の時間は発話の時間に一致し、現在時である。加うるに、(8 b)、(9 b)、(11)、(13)、(15) の各文は、事態の時間から指示の時間までの時間の広がりを含意している。これらの特徴は、(7) であげた完了的アスペクトの3つの特徴と合致し、完了性の表示こそが、〈- san⁴〉のプロトタイプの意味であることを物語っている。

2. 2. 揺れの現象

〈- san⁴〉は、本来、完了性表示の動名詞形接尾辞であるが、文脈に応じて完了表示か過去表示かのどちらかを指す例も散見される。この種の、いわば意味上の「揺れ」現象を概観していくことが、本節の目指すところである。

小沢 (1978, 1986) が述べているように、〈- san⁴〉は単独で終止形として

用いられるが、指定助詞の〈yum〉を後続させることもある。〈yum〉は談話の中で特有の役割を演ずる要素であるが、詳細な点に関する研究は、いまだ発表されていないように思われる。Street (1962:160) は、「不変化詞〈yum〉は、基本的には、話者の個人的な関与 (personal involvement of the speaker) を示すように思われる。陳述文の中で〈yum〉は、しばしば、話者の側での確信 (certainty) 『～のことは事実である (it's a fact that ~)』を示す。」と説明している。また、小沢、他 (1983:602) では、「名詞・動詞 (形動詞形) の後におかれ、それを指定する。」と解説し、日本語の「である、です」に対応する訳を与えている (併せて、小沢 (1978:91) 参照のこと)。³⁾

さて、〈-san⁴〉が〈yum〉の前にたつと、完了的な意味を帯びる場合と過去時の意味を帯びる場合の二通りの場合が観察される。

- (17) a. Bi taniltssan gej xezeeniy bodood l
私-[主] 知る-[相]-[完] [引] ずっと前に 思う-[分] 専ら
baysan yum.
いる-[完] [指]
(私はお知り合いになりたいとずっと以前から思っていました。)

- b. Manay orond xödöö aj axuyg negdeljüülex
私たち-[属] 国-[与位] 農牧業-[対] 統一する-[使]-[非過]
xödölgöön 1959 oniy etsseer duussan yum.
運動 年-[属] 終わり-[具] 完了する-[完] [指]
(我が国では、農牧業を統合させる運動は、1959年の終わりまでに完了したのです。)

(17a) の〈xezeeniy〉や (17b) の〈1959 oniy etsseer〉が時間の幅を明示することで、〈-san⁴〉の完了性が強調されている。

- (18) a. Bi Mongol Ulsiyn Ix Surguulid suraltsaj
私-[主] モンゴル国立大学-[与位] 勉強する-[相]-[連]

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

bayxdaa mongol xel sayn sursan yum.

いる-[時]-[再] モンゴル語 十分に 学ぶ-[完] [指]

(私はモンゴル国立大学で(他の学生たちと一緒に)勉強している時に、
モンゴル語を十分に学んだのです。)

b. Ta xezee irsen yum?

あなた-[主] いつ 来る-[完] [指]

(あなたはいつ来たのですか。)

(18) は 〈- san⁴〉 が過去時を表している文である。(18a) では、過去の時を指定する副詞節が、「モンゴル語を学ぶ」行為の時点位置づけている。

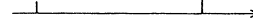
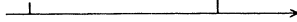
(18b) では、疑問詞 〈xezee〉 が、過去時の軸上の一点に「来る」行為を位置づけるよう要求している。

(19) a. bodox(17a)

b. surax(18a)

duusax(17b)

irex(18b)



ET

RT, ST

ET, RT

ST

ある種の接続詞に先行する 〈- san⁴〉 が、揺れを見せる場合がある。

(20) a. Gevch tsag ert baysan uchir xün chi

けれども 時間 早い ある-[完] ので 誰 も

ireegüy teatr chi ongoogyü.

来る-[未完]-[否] 映画館 も 開く-[未完]-[否]

(けれども、時間が早かったので、誰も来ていないし、映画館も開いていません。)

b. Aav irsen chi eej ireegüy.

父 来る-[完] だけれども 母 来る-[未完]-[否]

(父は来ましたが、母はまだ来ていません。)

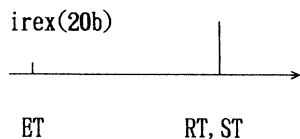
(20a) は理由の接続詞 〈uchir〉 を、(20b) は逆接の接続詞 〈chi〉 をそれぞれ含む文である。後半節に未完了形 〈- aa⁴〉 を置くことで、〈- san⁴〉 の完了性が際立たせられている。

- (21) a. Ted öchigdör oroy kontsert üzexeer
 かれら-[主] 昨日 晩 コンサート 見る-[非過]-[具]
 yavsan uchir geriyn daalgavraa dutuu xiyjee.
 行く-[完] ので 宿題-[再] 不十分な する-[過]
 (彼らは昨晚コンサートを見にでかけたので、宿題はできませんでした。)

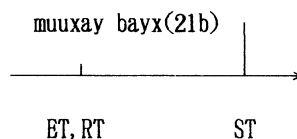
- b. Öchigdör tengen muuxay baysan bolovch xüüxdüüd
 昨日 天気 悪い ある-[完] だけれども 子供-[グ]
 uuland zugaalaxaar yavjee.
 山-[与位] ハイキングをする-[非過]-[具] 行く-[過]
 (昨日天気がとても悪かったのですが、子供たちは山にハイキングにでかけました。)

(21a) は理由の接続詞 〈uchir〉 を、(21b) は逆接の接続詞 〈bolovch〉 を含んでいる。これらの文は、形式の上から見れば、各々、(20a) と (20b) とに対応している。けれども、〈- san⁴〉 の守備範囲に当たる前半節に過去時指示の 〈öchigdör〉 があることにより、この接尾辞の過去性が確認されるのである。

(22) a. ert bayx(20a)



b. yavax(21a)



モンゴル語には、英語の 〈who (m), which, that〉 のように、関係詞節を形

成する標識がない。その代わりに、動名詞形接尾辞 〈- x, - aa⁴, - dag⁴, - san⁴〉が他の名詞句を修飾するという機能を担っている (Binnick (1979 : 84) 参照)。小沢 (1978 : 65) のように、名詞類を修飾することがこれらの接尾辞の本来の機能であるという立場をとり、「形動詞 (形容詞的な職能をもった動詞の一変形 (小沢 (1986 : 92) 参照))」と呼ぶ研究者もいる。それ程までに、名詞句の修飾表現として働く例が数多く見出されるのである。ここでは、〈- san⁴〉に限って観察する。

- (23) a. Süxbaatar 1919 onoos exlen niyslel Xüreend baysan
スフバートル 年-[奪] 以来 首都 フレー-[与位] ある-[完]
xevlex üyldvert ajillajee.
印刷所-[与位] 働く-[過]

(スフバートルは、1919年から首都フレーにあった印刷所で働いていました。)

- b. Öngörsön tavin jild manay ard түмний aj amidral
過ぎる-[完] 50 年-[与位] 私たち-[属] 人々-[属] 生活
ix öөрчлөгдлөө.
大変 改善される-[過]

(過去 (lit. 過ぎた) 50年間の間に、我が国民の生活は大いに改善されました。)

- c. Yer ni deer üyees ündesniy muzeydee
一般に ずっと以前-[奪] 民族-[属] 博物館-[与位]-[再]
xovor sonin üzmer begleseer irsen xün
稀な 興味深い 展示物 準備する-[継] 来る-[完] 人
manayd olon biy.

私たち-[与位] たくさん いる

(一般に、ずっと以前より民族博物館に珍しい興味深い展示物を用意し続けてきた人は、我が国にたくさんいます。)

(23) の修飾句の〈- san⁴〉は、過去のある時点から指示の時間までの継続を含意している。(23a) の行為の起点を表す〈1919 onoox exlen〉は、直接には述語動詞〈ajillajee〉にかかるが、働く場所も働く行為に伴って、少なくとも1919年から指示の時間まで継続して存在していたと解釈できる。

(23b) では、〈öörchlögdlöö〉と断定する指示の時間まで50年の期間のあったことを、修飾句は示している。(23c) の述語は現在時を指すが、修飾句内の副詞句〈deer üees〉と継続の副動詞形〈- saar⁴〉とが、過去のある時点から現在時までの行為の継続を表している。

このように、(23) の〈- san⁴〉は、事態の時間が指示の時間と関連性をもち、時間的な広がりを展開するので、完了表示であると規定することができる。

(24) a. Ulaanbaatar xot bolon oron nutgiyn büsees shalgarsan
 ウランバートル市 と 地方-[属] 地域-[属] 選ぶ-[完]
 120 garuy böx ulsiyn avargiyn toloo uran mex,
 以上 力士 全国-[属] チャンピオン-[属] ために 巧みな 技
 avxaalj sambaagaa sorij barildlaa.

機敏さ 機転-[再] 試みる-[連] 相撲をとる-[過]

(ウランバートル市と地方から選抜された120名余りの力士たちが全国チャンピオンになるために、巧みな技や機敏さを試しながら、相撲をとりました。)

b. Öchigdör irsen xün end suuj bayna.

昨日 来る-[完] 人 ここに 住む-[連] いる-[現]

(昨日来た人は、ここに住んでいます。)

c. Ööriynxöö bolon aav, eej, ax, egch, düü nariynxaa

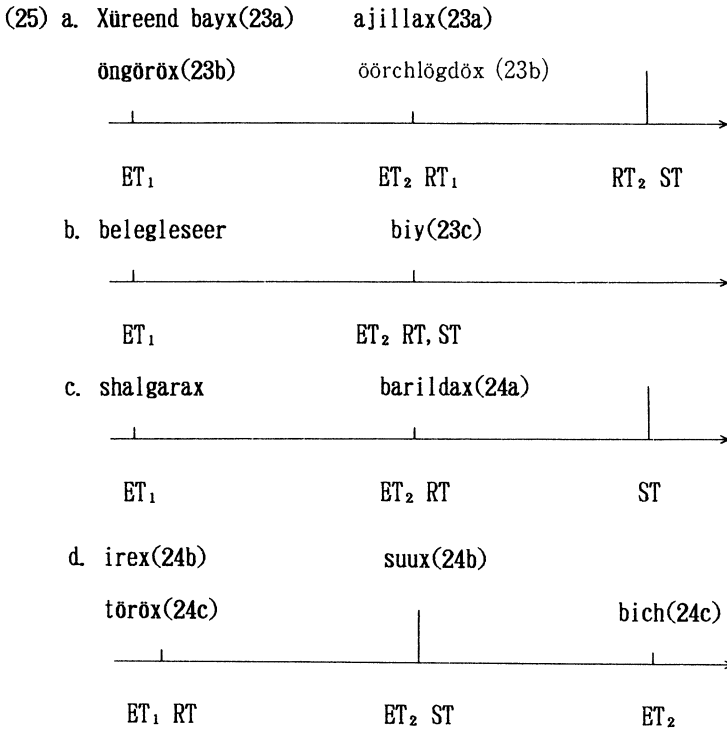
自分-[属]-[再] と 父 母 兄 姉 弟、妹 たち-[属]-[再]

töršon on, sar, ödriyg bich.

生まれる-[完] 年 月 日-[対] 書く-[2命]

(自分と父、母、兄、姉、弟、妹たちの生まれた年月日を書きなさい。)

(24) の各修飾句の 〈- san⁴〉には、完了的な意味合いはないように思われる。(24a) では、文全体のつながりから、「相撲をとる」時間に「選抜される」時間が先行することは明白である。(24b) の修飾句には過去時を指す 〈öchigdör〉があるため、「来る」時間は過去の行為であることがわかる。(24c) の「生まれる」という事態は、それが適用されるなら、当然、過去時に属することになる。



修飾句は埋め込み要素であるので、述語のテンス、アスペクトの中に修飾句のテンス、アスペクトが包み込まれる形になる。この二重構造を表すため、Reichenbach (1947) の図 (4) には多少の修正が必要である。(25a) では修飾句の事態 ET₁を指示する時間 RT₁があり、それと指示の時間に起こった事態 ET₂を全体的に捉える指示の時間 RT₂がある。これは、(4 a) の過去完了の図

式の変異形である。(25b)は、指示の時間にかかる事態 ET₂が加わっただけの現在完了(4c)の変異形である。一方、(25c)は、指示の時間と一致する ET₂が参与しただけの(4b)の過去形の変異形とみなすことができるだろう。

モンゴル語では、過去時の否定形は、一般に、〈-san⁴〉に否定形小辞〈-güy〉を付けて形成される。Poppe (1951:82)は、この形が過去形の〈-v〉の否定形に対応すると述べているが、同様に、〈-laa⁴〉や〈-jee / -chee〉の否定形でもある。3つの過去形接尾辞は、否定形において〈-san⁴güy〉に中和するのである。但し、〈-san⁴〉が完了的な意味を保持したままで否定されている事例も、若干ながら見出せる。

- (26) Teregch Luvsan 50 garuy naslaxdaa tiym tom
車引き ロブサン 以上 齢をとる-[時]-[再] このような 巨大な
shuvuu üzsengüy.

鳥 見る-[完]-[否]

(車引きのロブサンは50才余りの年齢になるまで、こんな大きな鳥を見たことはありませんでした。)

ここでは、時点の副詞節が「まで」のように期限を表し、時間の幅を明示することになる。〈üzsengüy〉は50年以上の年月の中で「見る」ことを否定しているのであり、完了的な意味が出てくるのである。

(26)のように文脈が整えさえすれば〈-san⁴〉の否定形は完了表示を担い得るのだけれど、数の上では過去表示の否定の意味の方が圧倒的に多い。

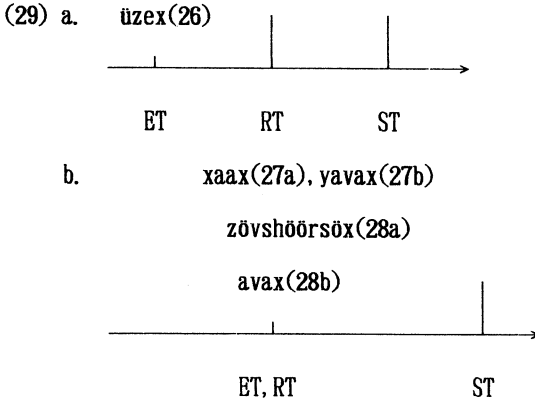
- (27) a. Batbayar gerees garaxdaa üüdee xaasangüy.
バトバヤル 家-[奪] 出る-[時]-[再] ドア-[再] 閉める-[完]-[否]
(バトバヤルは家を出る時に、ドアを閉めませんでした。)
- b. Bid Batiyn gerees garaad naash ni
私たち-[主] バト-[属] 家-[奪] 出る-[分] こちらへ [3所]
yavsangüy, tsaash ni yavlaa.
行く-[完]-[否] 向こうへ [3所] 行く-[過]

(私たちはバトの家を出て、こっちへ行ったのではなく、そっちへ行きました。)

(27a)は、時点の副詞節が「ドアを閉めない」事態の発生する時を指定している。(27b)は分離の副動詞形により、時間の軸に沿った一連の出来事が描かれている。後半節は否定形をはさんでの相対立する2つの部分からなり、〈naash ni〉と〈tsaash ni〉、〈yavsangüy〉と〈yavlaa〉が対立関係を形の上から支えている。この関係にあって、〈- san⁴〉は過去表示〈yavlaa〉を否定する働きをしていると解釈できるのである。

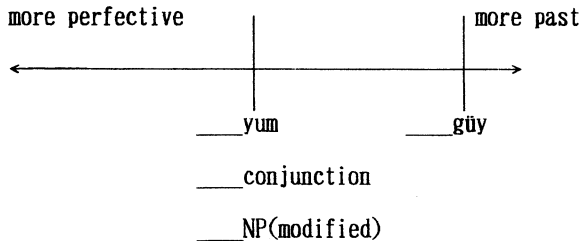
- (28) a. Bi gertee xarimaar baylaa. Bagsh zövshöör söngüy.
私-[主] 家-[与位]-[再] 帰る-[願] いる-[過] 先生 同意する-[完]-[否]
(私は自分の家に帰らなかった。先生は(それに)同意しませんでした。)
- b. Bid xoyor önöödör nomiyn delgüürt ochloo. Gevch nom
私たち-[主] 二人 今日 書店-[与位] 行く-[過] しかし 本
avsangüy.
買う-[完]-[否]
(私たち二人は、今日、本屋に行きました。けれども、本は買いませんでした。)

(28)は時間的な隔たりのない過去時の一連の出来事を記述した談話である。どちらの談話も、第1文で過去形の〈- laa⁴〉が述語を作り、その内容をうけて、〈- sangüy〉が否定の内容を与えるという形をとっている。この否定は過去時の事態の否定である。



以上のことから、〈- san⁴〉は出現の環境が同じような場合でも、文脈によって完了表示と過去表示との間に揺れがあることがわかった。これは、本来完了のアスペクト接尾辞である〈- san⁴〉が、使用域の拡大と共に意味上の広がりをも獲得する過程を示しているように思われる。共時態での完了表示から過去表示への移行的拡張は、様々な文形式で段階的な揺れの度合いを見せている。〈yum〉や接続詞、修飾句では、完了表示と過去表示の占める割合が均等に近いのに較べて、〈- güy〉との結合では、過去表示の占める割合が大きくなっている。いわば、否定形での過去表示への中和現象が見られるのである。

(30) 揺れの度合い



上図のような段階的な揺れを見せながら、〈- san⁴〉は過去表示の接尾辞としてのステイタスを最終的に獲得するに至ったと考えることができる。

2. 3. 過去表示

モンゴル語には、時間軸上の過去時に事態を位置づけるテンス表示接尾辞〈- laa⁴〉、〈- jee / - chee〉、〈- v〉が存在する。このうち〈- v〉は、疑問文以外では口語であり使用されず、代わりに、〈- san⁴〉が過去形接尾辞として頻用されていることが、Poppe (1970)、Vietze (1978)などで指摘されている。そこで、〈- san⁴〉の過去形用法の実例を見ながら、事実確認をしていくことにしよう。

- (31) a. *Öchigdör bi nom unshlaa / unshiv / unshsan.*
昨日 私-[主] 本 読む-[過] -[過] -[完]
(昨日私は本を読みました。)

- b. *Mongol ardiyn xuvigal 1921 ond yalsan.*
モンゴル 人々-[属] 革命 年-[与位] 勝つ-[完]
(モンゴル人民革命は1921年に勝利をおさめました。)

(31a) では過去時を特定する〈*öchigdör*〉があり、しかも、意味を変えずに3つの接尾辞を交替させることができる。(31b)には副詞句〈1921 ond〉が現れていて、出来事の過去時における特定化を行う。

- (32) a. *Taniyg töröxöd eej tani xeden nastay*
あなた-[対] 生まれる-[時] 母 [2所] いくつか 年齢-[共]
baysan be?
いる-[完] [疑]
(あなたがお生まれになった時、お母様はおいくつでしたか。)
- b. *Setgüülchiyg ter malchintay uulxaxad bi xamt baysan.*
新聞記者-[対] その 牧人-[共] 会う-[時] 私-[主] 一緒にいる-[完]
(新聞記者がその牧人に会った時、私は(彼と)一緒にいました。)

(32) は時間を指定する副詞節と〈- san⁴〉の述語を含む主節とから成る複文で

ある。副詞節の指す時点での「年齢」及び「存在」が、それぞれ、述べられている。

(33) a. Tsetseg boroo orson gej xellee.

ツェツェグ 雨 降る-[完] [引] 言う-[過]

(ツェツェグは雨が降ったと言いました。)

a'.Tsetseg boroo orno gej xellee.

降る-[現]

(ツェツェグは雨が降ると言いました。)

b. Tüürüü neg xeseg ajil tum ix baysan,

ちょっと前 一部分 仕事 非常に たくさん ある-[完]

oyrdoo ovoo gaygüy shig bayna.

最近 悪くない 大丈夫だ の様に いる-[現]

(ちょっと前まで大変忙しかったのですが、最近はまだまあです。)

(33a) は間接話法の文で、引用節内に〈-san⁴〉が登場している。

(33a') でわかるように、モンゴル語には英語の主節動詞により引き起こされる時制の移行現象 (tense shift) はない。引用節の時制は主節の時制から独立しており、過去時の出来事を表している。(33b) は過去時と現在時との対比を際立たせる文である。コンマの前が過去時の事態を、後が現在時の事態を記述していて、副詞句の〈türüü〉と〈oyrdoo〉が対比関係を補強している。

(34) a. A: Tegeed bilet avav uu?

その後 切符 買う-[過] [疑]

(その後切符を買いましたか。)

B: Avsan. Xarin nögöödriyn bilet avlaa.

買う-[完] しかし 明後日-[属] 買う-[過]

(買いました。でも、明後日の切符をかいました。)

b. M. Gorikiyin zoxyool 《Ex》 gedeg romanyig unshlaa.

ゴーリキー-[属] 作品 母 言う-[習] 長編小説-[対] 読む-[過]

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

Bas mongoliyn zoxyoolchdiyn xeden shüleg nayraglal
また モンゴル-[属] 作家-[格]-[属] いくつかの 詩 長編叙事詩
unshsan.

読む-[完]

(M. ゴーリキーの作品『母』という小説を読みました。また、モンゴルの作家たちの幾編かの詩や叙事詩をよみました。)

(34a) は対話である。A は過去形の 〈- v〉 で尋ね、B は同じ動詞に完了形 〈- san⁴〉を付けて答えている。しかも、補足的な説明の文では、同じ動詞に過去形の 〈- laa⁴〉を用いている。この3つの形は、一連の過去時の出来事を述べており、意味上の相違はない。(34b) は2つの文で構成された談話である。話者の読書体験を語っているが、2つの文は内容的に等位関係にあり、〈- laa⁴〉と 〈- san⁴〉とは意味を変えずに交替している。

〈- san⁴〉は、対格形接尾辞をとることで、その導く節全体が主節の他動詞の目的語になるような述語要素として機能する。このような節を目的語節と呼ぶことにする。

(35) a. Tanay xelsniyg bi medsen.

あなた-[属] 言う-[完]-[対] 私-[主] 知る-[完]

(あなたのおっしゃったことはわかりました。)

b. Bagsh taniy shalgaltaa sayn ögsniyg

先生 あなた-[属] 試験-[再] りっぱな 与える-[完]-[対]

nadad yarisan.

私-[与位] 話す-[完]

(先生は、あなたが試験をりっぱにうけたことを私に話しました。)

c. Mongoliyn ard түмний amidral xuvigalaas ömnö

モンゴル-[属] 人々-[属] 生活 革命-[奪] 前に

yamar baysan, xuvigaliyn daraa yamar bolsniyg

どのような ある-[完] 革命-[属] 後で なる-[完]-[対]

ūzej bolno.

見る-[連] できる-[現]

(モンゴルの人々の生活が、革命前にはどんなであったか、革命後にはどんなになったかを見ることができます。)

下線の部分が目的語節である。(35a, b) は、目的語節と主節双方に 〈- san⁴〉のある例であるが、目的語節で描かれた事態は過去時に属していることがわかる。(35c) は、主節述語が現在形 〈- na⁴〉をとり、指示の時間も発話の時間も現在時であることを示す。他方、目的語節の事態は過去時に位置づけられている。

目的語節と形の上で似ている構文に与位格節がある。これは 〈- san⁴〉に与位格形接尾辞が付いて形成される。

(36) a. Tantai taniltssandaa ix taatay

あなた-[共] 知り合う-[完]-[与位]-[再] 非常に うれしい

bayna.

いる-[現]

(はじめまして、どうぞよろしく。lit. (あなたとお知り合いになれて、とてもうれしいです。))

b. Uulzaltad oroltsochdiyn ömnöös K. Gros iynxüü

会見-[与位] 参加者-[グ]-[属] に対して このように

xüleen avch yariltssand M. S. Gorbachevt

接見する-[連] 話す-[相]-[完]-[与位] -[与位]

talaxal ilerxiylev.

謝意 表明する-[過]

(会見に参加した人たちに対して、K. グロスがこのように接見した際に、M. S. ゴルバチョフに謝意を表明しました。)

(36a) は慣用的な表現であり、与位格節の事態の先行することが「うれしい」感情の生じる前提になっている。(36b) は与位格節の事態と主節の事態とが同時であるが、共に過去時の軸上に位置を占めている。

Street (1962: 227) は、〈- san⁴〉と所有不変化詞 〈ni〉、もしくは再帰所有形 〈- aa⁴〉で終わる連鎖が、ある環境で副詞句として機能する事例に言及している。このような副詞句を、彼は、「絶対所有連鎖 (absolute possessive sequence)」と呼んでいる。

- (37) a. Manay üüdiyг neg xün togshiv. Üüdee neesen
 私たち-[属] ドア-[対] 1 人 叩く-[過] ドア 開ける-[完]
 ni, nōxör Baatar bayv.
 [3所] 友人 いる-[過]
 (私たちの(部屋の)ドアを誰かがノックしました。ドアを開けると、友人のバートルがいました。)
- b. Gertee xarij irsen ni, manay üüden
 家-[与位]-[再] 帰る-[連] 来る-[完] [3所] 私たち-[属] ドア
 deer ulaan torgon alchuurтай бүсгүй зогсоj
 に 赤い 絹の スカーフ-[共] 女性 立っている-[連]
 bayna.
 いる-[現]
 (家に帰って来ると、私たちの(家の)ドアの所に赤い絹のスカーフを着けた女性が立っているのです。)

「絶対所有連鎖」は英語の独立分詞構文と類似しており、主節で語られる事柄の背景を導入する機能を担っている。(37b) の主節動詞は現在形であるが、これはいわゆる「物語の現在形」で、文全体の描く事態は過去時であると言って差し支えない。

以上の例から、〈- san⁴〉が文末の終止形として用いられる場合、あるいはいくつかの文形式に現れる場合、完了的な意味を失い、単に、指示の時間／発

話の時間からの先行性を表す過去表示であることが確認できた。このような〈-san⁴〉は、過去形〈-laa⁴、-jee / chee、-v〉と意味を変えずに交替可能なテンス表示の形式とみなせるのである。

2. 4. まとめ

〈-san⁴〉は完了的アスペクト形として〔先行性〕、〔広がり〕、〔関連性〕を併せ持っている。このうち〔関連性〕が欠落することで〔広がり〕の含意も失われ、〔先行性〕だけを有する過去表示へと意味上の移行が起こったと考えられるのである。移行の中間段階として、完了表示か過去表示のどちらかを示す「揺れ」の現象が観察される。

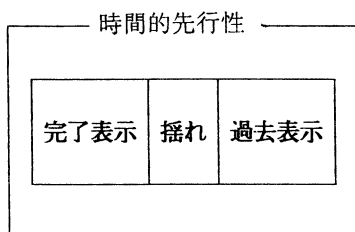
(38) 〈-san⁴〉の意味の移行過程

Perfective → Perfective / Past → Past

(38) は通時的变化を示すものではなく、共時態での意味の拡張を示すものである。したがって、〈-san⁴〉の完了表示、完了／過去表示、過去表示の3つの意味は、出現の環境は異なるにしても、共時態のレベルで共存しているのである。

完了表示と過去表示とが共有する特徴は、〔指示／発話の時間からの事態の時間の先行性〕であるから、これを媒介にして2つの意味は結びついている。

(39) 〈-san⁴〉の意味



(39) が示すように、〈- san⁴〉は時間的先行性という大きな意味領域を持ち、その下位領域として2つの意味が部分的に重なる形で結び合わさっているのである。

3. 先行性の拡張

〈- san⁴〉の意味のプロトタイプが完了表示である限り、それは時間の概念化と深く係わっている。完了表示から過去表示へと意味上の移行を経た後でさえも、時間の概念化の枠内にとどまるのである。

ところで、〈- san⁴〉の用例をつぶさに検討していくと、一見、時間との結びつきがないと思われるものにぶつかる。「非・時間的」と名付けてもよいような用法は、〈- san⁴〉のプロトタイプの意味とどのように関連づけられるのだろうか。具体的なデータを分析しながら、時間的な意味と非・時間的な意味との接点を探っていくことが、本節の目的になる。

3. 1. 心的先行性

3. 1. 1. 仮定、譲歩

(40) a. Eejiyg ajildaa yavbal bi geree
母-[対] 仕事-[与位]-[再]行く-[条] 私-[主] 家-[奪]

tseverlene.

掃除する-[現]

(母が仕事に行くなら、私は家を掃除します。)

b. Eejiyg ajildaa yavsan bol bi geree tseverlene.

行く-[完][条]

(母が仕事に行ったなら、私は家を掃除します。)

(40) は、条件文である。aとbの形式上の違いは、条件形が直接動詞語幹に付加されたか、〈- san⁴〉を介して間接的に接続しているかである。意味上の違いは、aの〈bal⁴〉節が掃除をするための条件を提示しているのに対して、

b の〈bol〉節は仮定を提示している。「母が仕事に行く」事態が話者の仮定世界ではすでに実現していて、それが現実世界では未来時に属する「掃除をする」行為につながっているのである。

(41) a. Bi yaasan chi yavaxgüy.

私-[主] どうする-[完] しても 行く-[非過]-[否]

(わたしはどうあっても lit. (何をしたとしても)行きません。)

b. Bi üxsen chi yasiy ni andaxgüy.

私-[主] 死ぬ-[完] しても 骨-[対] [3所] 間違う-[非過]-[否]

((死んでも骨を間違わないの意で)私は彼を大変よく知っています。)

lit. (私は死んだとしても、彼の骨を間違いません。)

(41) は譲歩節を含む文である。前半節では、現実世界では実際にあり得ないがあり得るような可能世界を想定して、その中で起こった事態を、後半節で否定するのである。

(42) a. Chi ene nomiyg namayg unshasaniy daraa

君-[主] この 本-[対] 私-[対] 読む-[完]-[属] 後で

unshaaray.

読む-[願]

(君は、この本を私が読んだ後で読んでください。)

b. Namayg yavsnaas xoysh geree tseverleerey.

私-[対] 行く-[完]-[奪] 後で 家-[再] 掃除する-[願]

(私が出た後で家を掃除してください。)

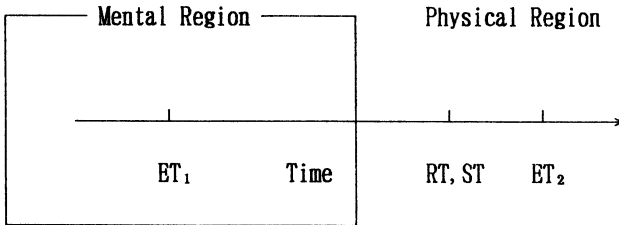
(42a) の〈daraa〉節の「本を読む」行為も、(42b) の〈xoysh〉節の「家から出る」行為も、実際にはまだ行われていない。そうした行為がすでに実現したものと仮定した前提に立って、主節の願望を表明しているわけである。

(40)、(41)、(42) からわかるように、話者は現実世界とは別に自分自身の心的領域内にもう1つの世界を構築し、その世界の中で事態を概念化し、实在

〈-san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

性のあるものとして設定するのである。この心的世界にも、現実世界とは別に
もう1つの時間が存在しており、そこでの時間の軸上に、事態はすでに起こっ
たものとして位置づけられるわけである。(40)、(42)の条件・仮定節も、(41)
の譲歩節も、心的世界の時間で先行性をもつ事態を表すのである。これを図示
すると、次のようになる。

(43) Temporal Anteriority Relation



ET₁は仮定や譲歩節の事態の時間を、ET₂は主節の事態の時間を表す。

話者の心的領域内で、事態が時間的にすでに先行してあるものとして概念化
されている場合、その事態は「心的先行性 (Mental Anteriority)」をもつと定
義することにしよう。(43)のタイプの先行性は、現実の発話の時間から心的
領域内の事態の時間が先行すると解釈できるので、第2節で論じた時間的前行
性との間にある程度の関連性を認めることができる。

3. 1. 2. 修飾句

第2. 2節で、修飾句が完了表示と過去表示とを表す揺れの現象の環境を作
ることを見た。ところが、時間的前行性を含意しない例が見いだされる。

- (44) a. Getel xaragdaxgüy yum bol bayxgüy
 しかし 見る-[受]-[非過]-[否] 物 [主題] ある-[非過]-[否]
 yum gesen batlagaa ügüy.
 物 言う-[完] 確証 [否]

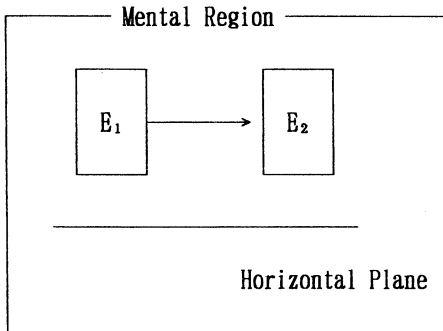
(しかし、見えない物は存在しない物であるといった確証はありません。)

b. Ta ööriyn medex öngö, xelber,
 あなた-[主] 自分-[属] 知っている-[非過] 色 形
 dürs zaasan neree tüüj bich.
 外形-[グ] 示す-[完] 名前-[再] 集める-[連] 書く-[2命]
 (あなたは、自分の知っている色、形などを示した名前を集めて記し
 なさい。)

a は確証の中味を特定する目的で 〈- san⁴〉 が修飾句を率いている。これは心的領域内に修飾句の示す確証の内容を予め概念化しておいて、それを 〈bat - lagaa〉 に引き当てるという解釈の仕方を考えることができる。同様に、b も、既知の色や形を心的領域内に1つ1つ前もって置いてから、その後で、各々に正しい名称を当てはめていく過程を思い描くことができる。

(44) の 〈- san⁴〉 には時間的先行性の含意はないけれど、空間的先行性の含みは確かにあるのである。そして、時間的なものが空間的なものへ転移すること、反対に、空間的なものが時間的なものへ転移することは、認知の仕方の中で一般に知られている事柄である。(例えば、英語の前置詞 〈at, in, for, before, after〉 などが、時間表示にも空間表示にも用いられるという事実がある。)

(45) Spatial Anteriority Relation



(44) の 〈- san⁴〉 の意味は、(45) で図示したように、心的領域という空間の中の水平面に沿った2つの事態 E₁ と E₂ との順序づけに基づく先行関係と捉え

ことができよう。被修飾句の表す E₂を基点に、修飾句の表す E₁が E₂より前に位置づけられるのである。

3. 1. 3. 比較構文

〈-san⁴〉は比較構文で現れる。比較要素と被比較要素が動詞である場合、動詞語幹に〈-san⁴〉が付き、被比較要素は奪格形をとり、比較要素は3人称所有形を従える。

- (46) a. Us uusnaas tsay uusan ni deer.
水 飲む-[完]-[奪] 茶 水-[完] [3所] よりよい

(水を飲むよりお茶を飲む方がよい。)

- b. Temeeger yavsnaas moryoor yavsan ni deer.
ラクダ-[具] 行く-[完]-[奪] 馬-[具] 行く-[完] [3所]よりよい
(ラクダで行くより馬で行く方がよい。)

(46)の各文には、完了性の意味も過去性の意味もない。2つの比較の対象となる行為が較べられているだけである。

比較の操作においては、2つの等価と思われる事態が話者の心的領域に設定され、どちらにより高い価値を与えるかを決定する。2つの事態は、必ずしも形式として具現される必要はない。比較要素だけが現れる場合もある。

- (47) Salxivchaa xaasan ni deer.
通風口-[再] 閉める-[完] [3所] よりよい

(通風口は閉めたほうがよいです。)

被比較要素に比較要素と対立する〈salxivchaa neesnees 「通風口を開けることより」〉を想定することができるが、形式としては実現せず、話者の心的領域内で概念化されるにとどまっている。

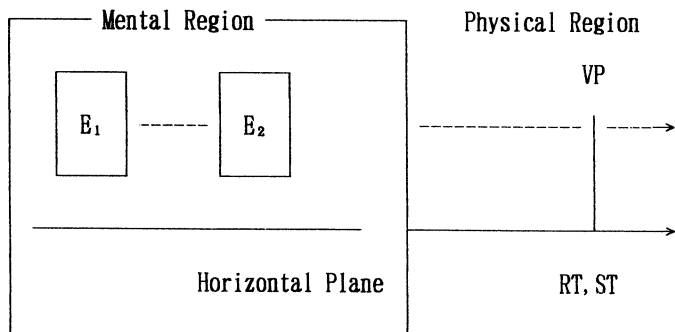
比較構文は、被比較要素が比較要素に先行する語順をもつが、価値の優劣関

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

実体としてあるのである。実在しているからこそ、手に取りながら、あるいは、指し示しながら、「これよりそれの方がよい。」と言明するのと全く同じ仕方で優劣の判断を下すことができるのである。

諸者の心的領域内で事態が概念化され、客観的な実在性をもつということ、あたかも目の前に横たわっている知覚可能な物体のように、抽象度の高い事態が心的世界に内包されていること、このような様態も心的先行性の事例に数えることができるだろう。話者の認知活動の中で、すでに概念化されているがゆえに、2つの事態は比較できるのである。

(49) Spatio-Temporal Anteriority Relation



☆VPは「視点」を表す。

3. 1. 4. 慣用的表現

〈- san⁴〉はいくつかの慣用的表現に登場する。

- (50) a. Bi üsee xaraar buduulax gesen yum.
 私-[主] 髪-[再] 黒い-[具] 染める-[使]-[非過] 言う-[完][指]
 (私は髪を黒く染めてもらうところです。)
- b. Bi Xödöö Aj Axuyn Deed Sarguuli deer ochix
 私-[主] 農業大学 に 行く-[非過]

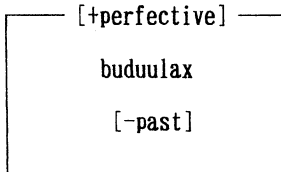
gesen yum.

言う-〔完〕 〔指〕

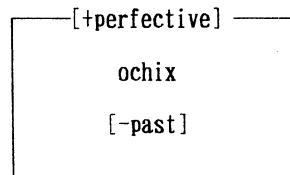
(私は農業大学に行くところです。)

非過去動名詞形〈-x〉の後に〈gesen yum〉を続けた句は、行為の開始点を含む近未来時を表示する。近未来時表示句の第2要素〈gesen〉は〈ge-〔言う〕〉の完了形である。純粹にテンス・アスペクトの時間表示に係わるなら、〈-san⁴〉は時間的先行性を指すことから、未来時の表示は排除されるはずである。一方〈gesen〉の前の〈-x〉は、通常、未来時に属する事態を表す。発話の時点でまだ実現していない事態である。モンゴル語では、原則として、文末に近づけば近づく程、その要素の及ぶ支配領域が広がる傾向がある。(例えば、疑問詞〈uu / üü〉、否定辞〈-güy〉の文末の位置、副動詞形動詞の主節動詞へのテンス・アスペクトの依存性等を参照のこと。)したがって、〈-x〉は〈gesen〉の支配下にあり、完了表示に包み込まれた未来時を示すことになる。(〈yum〉の直前で〈-san⁴〉は完了表示か過去表示のどちらかであることは、第2.2節を参照のこと。)

(51) a.

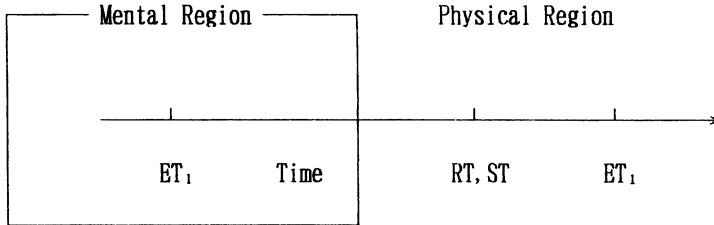


b.



非過去形の未来時表示に完了性が付与されることで、話者の心的領域内では〈-x〉付き動詞形により示される事態がすでに実現したものとして概念化されており、それが現実世界では未来時に投影されるという仕組みを想定できる。すなわち、〈-x gesen yum〉は、心的領域内の時間的先行性を表すということが出来る。

(52) Temporal Anteriority Relation



☆ET₁' はET₁ の投影されたもの。

- (53) a. Gadaa tenger tselmeg chi gesen xüyten bayna.
 外 天気 晴れた [強助] 言う-[完] 寒い ある-[現]
 (外は天気がよいけれど、寒い。)

b. Gadaa tenger tselmeg bolovch xüyten bayna.
 だけれども

- (54) a. Ene gutal ix ünety chı gesen sayxan gutal.
 この ブーツ とても 高価な よい
 (このブーツはとても値段が高いですが、よい靴です。)

b. Ene gutal ix ünety bolovch sayxan gutal.

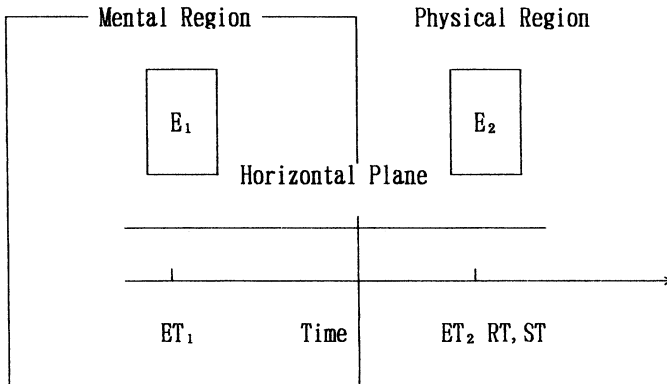
強意の助詞〈chi〉と完了形〈gesen〉の組み合わせは、逆接の接続詞として機能する。この結合体は、意味的に〈bolovch〉と対応する。

逆接の〈gesen〉は、(51)の〈gesen〉よりも時間的な意味合いは希薄である。但し、対応形〈bolovch〉が、元々、〈bolox〉に譲歩の接尾辞〈-ch〉が付加してできたのと同様に、〈chi gesen〉にも譲歩的な含意が存在しているように思われる。これは、第3. 1. 1節で採り上げた「假定、譲歩」の〈- san⁴〉を想起させる。ただ、「假定、譲歩」では、主節の事態は未来時に位置づけられたが、(53)、(54)では、後半節の事態は現在時に位置づけられる。

さらに、(53a)、(54a)は、第3. 1. 3節で検討した比較構文とも類似している。前半節で提示した事態をいったんは認めた上で、後半節はそれを一部

否定するような値の事態を導入するのである。比較構文では2つの異なる事態の価値判断が述べられたが、〈chi gesen〉では、1つの同じ事態について相対立する価値判断が語られるのである。

(55) Spatio-Temporal Anteriority Relation



複合語に参加する構成要素に〈- san⁴〉の現れる場合がある。

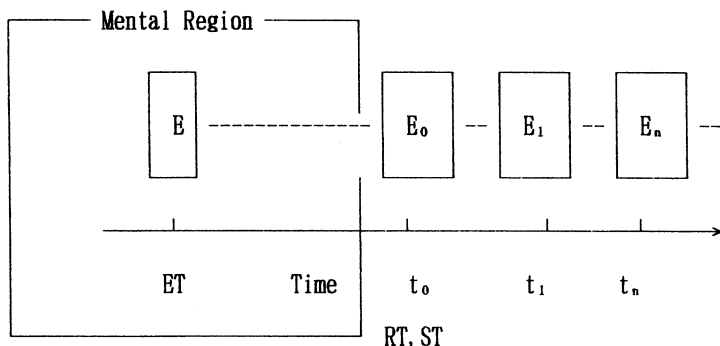
- (56) a. tagnayshsan giygüülegch
 口蓋化する-[完] 子音
 (口蓋化子音)
- b. sengenesen ünér
 よい匂いが漂う-[完] 香り
 (香気、芳香)
- c. oyr dashlan suusan ger
 近くに 隣接する-[連]ある-[完] 家
 (隣接家屋)
- d. saya saasan süü
 ちょうど今 搾乳する-[完] 乳
 (搾りたての乳)

複合語の主要部は名詞であり、複合語全体も1つの単位として名詞の範疇に入る。名詞は、一般に、それ自体無時間的であるから、(56)の複合語も時間上の制約から解き放たれているはずである。では、なぜ、無時間的性質の名詞複合語の内部に〈- san⁴〉が用いられているのだろうか。

〈- san⁴〉のプロトタイプの意味は完了表示であった。完了性の特徴には、〔指示／発話の時間からの事態の時間の先行性〕と〔事態の時間と指示／発話の時間との関連性〕があった。第2. 3節で言及したように、このうち後者の特徴が落ちると、過去表示への移行が生じた。反対に、前者の意味が落ちると〔過去性〕の含意がなくなり、〔事態の結果の存続性〕が顕著になってくる。過去時のある時点で出現した事態が、指示／発話の時点に存在し、将来においても存在し続けるという含意である。指示／発話の時間（現在時に属する）から未来時へと延びる存続性は、時間を明示する要素、もしくは文脈がない限り無時間的である。すなわち、時間の軸が未来時に向かって無限に志向していくのに対応して、事態も存在し続けると考えられるのである。複合語の〈- san⁴〉も、〔先行性〕を失い〔関連性〕だけを保持した事例である。

aの子音は「口蓋化した」結果の状態を、bの香りは「よい匂いが漂った」結果の状態を、cの家は「近くに隣接した」結果の状態を、dの乳は「たった今搾った」結果の状態を、それぞれ典型的な特徴として有しているのである。

(57) Spatio-Temporal Anteriority Relation



複合語の〈- san⁴〉は、時間的な先行性、あるいは空間的な先行性を心的領域内に押し止めてほめかしながら、その結果の状態を際立たせる働きをするのである。

〈- san⁴〉が語の要素として現れる例がある。

(58) a. Ongotsniy buudal xotoos xol bolovch bid

飛行場 町-[奪] 遠い けれども 私たち-[主]

udsangüy irlee.

間もなく 来る-[過]

(飛行場は町から離れていましたが、私たちはほどなくして到着しました。)

b. Ter yavaad udsangüy tsaas xarandaa barij

彼-[主] 行く-[分] 紙 鉛筆 もつ-[連]

irev.

来る-[過]

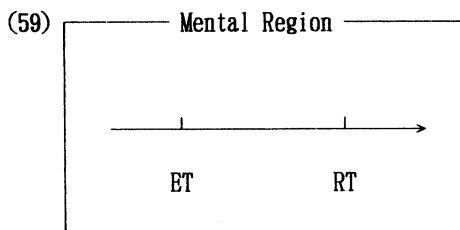
(彼は行ってほどなくして紙と鉛筆を持って来た。)

文中の副詞〈udsangüy〉は、動詞〈ud - 「時間がかかる」〉、完了形〈- san⁴〉否定形〈- güy〉に分析できる。このままの形で用いられる固定した形式であるが、意味的には時間の幅を暗示しているように思われる。aでは、飛行場と町との距離から、到着するまでのあいだにある程度の時間のかかったことが推察できる。bでは、行ってから紙と鉛筆を持って戻って来るまでの間に、その動作をするのにかかる時間の経過を予測することが可能である。

〈udsangüy〉の意味の一部分として、事態の始発点から終端点までのある程度の時間の広がり の指示を含んでいるのである。これは〈- san⁴〉の完了性の特徴の1つ、〔事態の時間から指示／発話の時間までの時間の広がり〕に照明をあてた事例と考えられる。

〈udsangüy〉は副詞としてそれ自体は特定の時間表示に関与しないが、意味の一部に時間の幅は概念化されているのである。この概念化を心的領域に写

像して捉えると、次のようになる。



(59) の図式は、ST（発話の時間）を欠くことで、現実世界との接点はなく、あくまで語内部に〈- san⁴〉の意味の及ぶ範囲が限定されることを表している。

3. 2. 知覚的先行性

第3. 1節で、現実世界とは別の話者の心的領域の中で、〈- san⁴〉が時間的空間的な先行性を指示する例を見た。そのうち、心的領域内の時間的先行性と現実世界において対応するものが、完了表示や過去表示である。では、心的領域内の空間的先行性に対応するものが、現実世界においても存在するのだろうか。数こそ少ないとはいえ、そのような例を見つけることはできる。

(60) a. End manay orniy soyoliyn xógjliyg

ここに 私たち-[属] 国-[属] 文化-[属] 発展-[対]

xaruulsan xeseg biy.

見る-[使]-[完] 部門 ある

(ここには我が国の文化の発展をみせたコーナーがあります。)

b. Tend manay orniy üyldver, xödöö aj axuy, soyol, urlag,

そこに 工業 農牧業 文化 芸術

gadaad xariltsaaniy xógjliyg xaruulsan olon

外国の 関係-[属] 発展-[対] 見る-[使]-[完] たくさんの

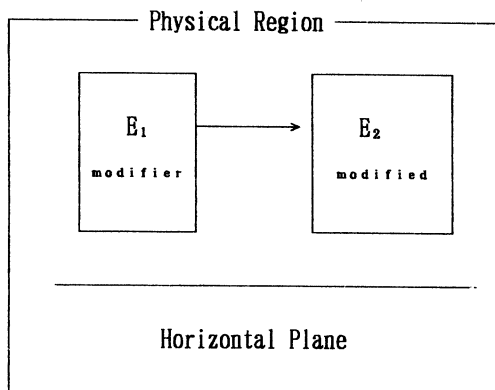
sayxan zurag bayna.

美しい 写真 ある-[現]

(そこには我が国の工業、農牧業、文化、芸術、外交関係の発展を見せたたくさんの美しい写真があります。)

博物館のような場所で、展示物を眺めながら解説しているガイドの姿を、想像することができるかもしれない。〈-san⁴〉が率いる句は修飾句であり、接続する名詞句の内容を特定しているのであるが、〈xaruulsan〉は被修飾名詞句の指示対象を視覚という知覚の領域内で空間的に認知していることを示している。目の前に実際にある対象を一定の距離を置いた視点から見ているのである。これは、第3. 1. 2節で考察した修飾句の場合と平行な関係にある。但し、先の修飾句の〈-san⁴〉が心的領域という心理的空間に被修飾名詞句の指示対象を位置づけたのに対して、(60)の修飾句の方は、現実世界の空間に指示対象を位置づけている点が異なる。

(61) Spatial Anteriority Relation



3. 3. まとめ

〈-san⁴〉の非・時間的先行性は、心的先行性と知覚的先行性に区分することができた。心的先行性は、現実世界の時間軸に沿った事態の把握の仕方とは別に、話者の心的領域内で展開する事態を扱うので、「非・時間的」先行性

〈- san⁴〉の意味論：1つの形式と複数の意味の対応について

の分類に入れたのである。しかしながら、心的領域内で事態を時間的な順序に従って位置づけるもの、時間的な順序に空間的な配置を加味して位置づけるもの、さらに、純粹に空間的な配置のみから位置づけるものと、3つのタイプが確認された。

(62) 心的先行性(Mental Anteriority Relation)

時間的先行性		空間的先行性
仮定、譲歩 -x gesen yum 複合語、udsangüy	比較構文 chi gesen	修飾句

知覚的先行性に関しては、時間的先行性と同じく現実世界の事態を扱うにもかかわらず、時間とは何ら関係しない点で「非・時間的」と呼ぶのである。知覚的先行性は空間的先行性に所属し、その意味では心的領域内の空間的先行性と領域のレベルを異にするとはいえ、関連性はあるように思われる。

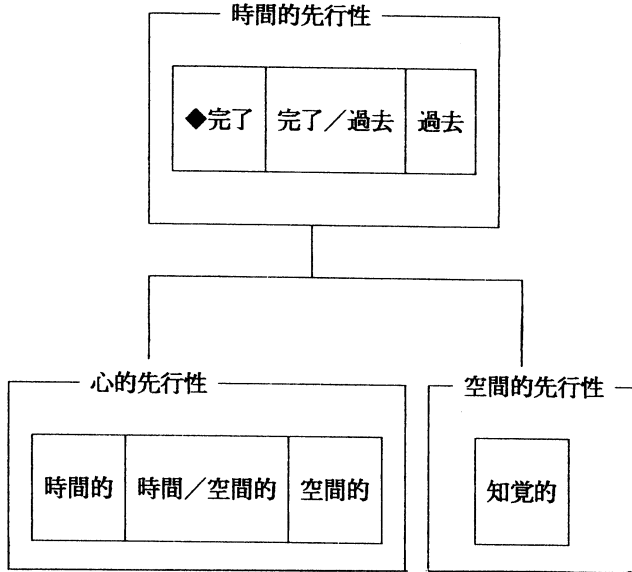
4. 結 論

これまでの考察を通して、〈- san⁴〉には実に多様な用法のあることを見えてきた。多様な用法の数だけ多様な意味を認め、項目をいくつか設けて記述するのも1つの方法である。この方法によれば、〈- san⁴〉は多義の意味を備えた形式であると規定でき、形式と意味との1対多の関係を肯定する結果となる。

けれども、〈- san⁴〉の個々のデータを検討する中で、多義とみなされてきた意味は、実際には、1本の糸でつながるといふ事実が明らかになった。時間的先行性、心的先行性、知覚的先行性の各意味表示は、現実世界か心的領域か、時間的座標か空間的座標かという具合に、直接関与する領域は違っているが、[事態の先行性]というたった1つの意味により、互いに関連づけられたものと

なるのである。言い換えるなら、[先行性の表示]を媒介にして、複数の意味を1つのネットワークへと統合することができるのである。

(63) <-san⁴> の意味のネットワーク



<-san⁴> のプロトタイプの意味は[完了表示]である。[完了表示]は、ネットワークの核となる。[完了表示]を支える特徴が欠落すると、[過去表示]が派生する。但し、[完了表示]と[過去表示]との間に明確な境界線が引かれるわけではなく、段階的漸次的な移行過程の様相を呈するのである。

[完了表示]と[過去表示]とは時間的先行性を共有するものとして有縁化される。

心的先行性は、時間的先行性と違って、話者の主観的な領域を主な舞台とする。その非・現実世界における時間的先行性は、理実世界の客観的な時間軸に沿った先行性と質的に異なっている。しかし、心的領域内で作り上げられた主観的な時間軸には従うという点で、現実世界の時間的先行性との間に、なお、並行性を保持していると考えられるだろう。

心的領域内の〔時間的先行性表示〕と〔空間的先行性表示〕の間でも明確な色分けがなされているわけではない。第3. 3節で見たように、段階的漸次的な過程をとるのである。

〔知覚的先行性表示〕は、空間的先行性の1つとみなすことができる。この表示は、再び、現実世界を実現の場とするが、心的領域内での〔空間的先行表示〕とパラレルな関係にあることがわかる。前者は客観的な空間を占有し、後者は主観的な空間を占有するが、両者とも空間内に事態を位置関係の観点からのみ位置づけるのである。

〈- san⁴〉という1つの形式は複数の意味に対応するのではなくて、1つの意味のネットワークに対応する。このネットワーク自体は、〔先行性〕という有縁化の基になる意味を介して結び合わされ、互いに関連し合う意味組織体を構成するのである。

Lakoff and Johnson (1980)、Lakoff (1987)、Langacker (1987,1991)、Heine (1992)等でしだいに受肉しつつある認知言語学 (cognitive linguistics) もしくは認知文法 (cognitive grammar) は、言語を自律性の縄目から解放して、もう一度、人間の認知活動の手に戻す役割を演じている。「言語学は科学である。」との客観主義を装ったテーゼは捨て去るべき時期に来ているのである。言語は、形式の面でも、人間の認知の仕方という主観的な営みを既存の言語体系の制約中で、最大限に反映させていると思われる。Haiman (1985)らの提言した言語の「類像性 (iconicity)」は、けして特殊な事柄ではなく、ごく普通にどの自然言語でも観察される事実なのである。

〈- san⁴〉の意味は、認知言語学の提起した代表的な観念、「プロトタイプ論」や「意味の放射状のネットワーク (radial network)」の妥当性を見事に証明している。とはいえ、理論的な枠組みの正当性を訴えるのが本稿の目的ではない。〈- san⁴〉の多様と見える意味に取り組んでいった結果、たまたま、認知言語学と交差する地点にでくわしただけのことである。

今後、形式と意味との対応関係を、接尾辞のような小さな形式にとどまらず、語、句、文のようにより大きな形式に広げて数多く研究していくことで、完了

形接尾辞と類似の対応関係が発見されたなら、それだけ認知言語学の理論の面にも貢献できるであろう。〈- san⁴〉の意味論は、大きな広間に入るためのささやかな入口の1つにすぎないのである。

【略語表】

引	：引用形	再	：再帰所有形	2 所	：2 人称所有形
受	：受け身形	3 所	：3 人称所有形	2 命	：2 人称命令形
過	：過去形	使	：使役形	否	：否定形
勸	：勧告形	指	：指定辞	分	：分離副動詞形
願	：願望形	時	：時点副動詞形	未完	：未完了形
完	：完了形	習	：習慣形	連	：連結副動詞形
疑	：疑問形	主	：主格形		
強助	：強意助詞	主題	：主題辞		
共	：共同格形	条	：条件副動詞形		
具	：具格形	相	：相互形		
グ	：グループ形	属	：属格形		
継	：継続副動詞形	対	：対格形		
現	：現在形	奪	：奪格形		

【注】

- 1) 〈- san⁴〉は母音調和の原則に従って 〈- san, - sen, - son, - sön〉の4つの交替形をもつ。尚、接尾辞の右肩に付いている数字は、母音調和による交替形の数を表す。
- 2) 〈- xad⁴〉は、非過去形 〈- x〉 + 繋ぎの母音 + 与位格形 〈- d〉に分析することができるが、1つの形式としての時の副動詞節を導くので、「時点」の副動詞形として扱うことにする。
- 3) 本稿の「動名詞形」に当たる。

【参考文献】

- Binnick, Robert I. 1979. *Modern Mongolian: A Transformational Syntax*.
University of Toronto Press: Toronto.
- _____. 1991. *Time and the Verb: A Guide to Tense & Aspect*. Oxford
University Press; New York / Oxford.

- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge University Press ; Cambridge.
_____. 1985. *Tense*. Cambridge University Press ; Cambridge.
- Dahl, Östen. 1985. *Tense and Aspect Systems*. Basil Blackwell : Oxford /
New York.
- Haiman, John. 1985. *Natural Syntax : Iconicity and Erosion*. Cambridge
University Press ; Cambridge.
_____. (ed) 1985. *Iconicity in Syntax*. John Benjamins Publishing
Company ; Amsterdam / Philadelphia.
- Hangin, Gombojab (ed.) 1986. *A Modern Mongolian-English Dictionary*.
Indiana University Research Institute for Inner Asian Studies ;
Bloomington.
- 服部四郎. 1987. 「蒙古とその言語」 『服部四郎論文集 2 アルタイ諸言語の
研究Ⅱ』 98-106. 三省堂；東京.
- 橋本邦彦. 1992. 「複数性の意味論—『弱い言語相対説』に向けて」 『文化
言語学—その提言と建設』 978-992. 三省堂；東京.
- Heine, Bernd. 1992. "Grammaticalization Chains," *Studies in Language*
16, 335-368.
- 栗林 均. 1992. 「モンゴル語」 『言語学大辞典 第4巻下—2』 501-517.
三省堂；東京.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories
Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press ;
Chicago / London.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago
Press ; Chicago / London.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 1 .
Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press ; Stanford.
_____. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 2 .Descriptive
Application*. Stanford University Press ; Stanford.
- Lvsanjav, Choy, et al. 1976. *Mongol Xel Surax Bichig*. Ulan Bator.
- 小沢重男. 1978. 『モンゴル語の話』 大学書林；東京.
_____. 1986. 『増補モンゴル語四週間』 大学書林；東京.
_____. 編著. 1983. 『現代モンゴル語辞典』 大学書林；東京.
- Poppe, Nikolaus. 1951. *Khalkha-Mongolische Grammatik*. Franz Steiner
Verlag GMBH ; Wiesbaden.
_____. 1970. *Mongolian Language Handbook*. Center For Applied
Linguistics ; Washington D. C.

- Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. Macmillan ; London,
- Sanzheyev, G. D. 1973. *The Modern Mongolian Language*. 《NAUKA》
Publishing House ; Moscow.
- Smith, Carlota S. 1991. *The Parameter of Aspect*. Kluwer Academic Publishers ;
Dordrecht.
- Street, John C. 1962. *Khalkha Structure*. Indiana University ;
Bloomington.
- Vietze, Hans-Peter. 1978. *Lehrbuch der Mongolischen Sprache*. VEB
Verlag Enzyklopädie : Leipzig.

学術研究発表集録

文科編

(平成4,4,1～5,3,31)

人間・社会科学

松本敏治
古塚孝 精神遅滞者の単文産出について 日本心理学会第56回
(北海道大学) 大会発表論文集 1992, p.545

松本敏治
古塚孝 幼児の単文理解過程— 日本教育心理学会第
(北海道大学) 「文フォーマット」の分析から 34回総会発表論文集
滝澤真毅 1992, p.248
(北海道大学)
(教育学研究科)

言語科学

橋本邦彦 複数性の意味論—「弱い言語相対説」に向けて 三省堂 978-992
『文化言語学—その提言と建設』所収 (1992)

橋本邦彦 引用節の境界 日本モンゴル学会紀 22/23, 29-41
要 (1992)

CONTENTS

Cultural Science

Nov. 1993

Whole No. 43

Marx and Freedom	Shiraishi Masao	1
The event probability strategy of simple sentence comprehension in mentally retarded individual	Toshiharu Matsumoto	27
SEMANTICS OF 〈- san ⁴ 〉 : ON THE CORRESPONDENCE BETWEEN ONE FORM AND MULTIPLE MEANINGS	Kunihiko HASHIMOTO	49
Other Achievements Studies for 1992 by Professor in this Institute		95

平成 5 年11月25日 印 刷 (非売品)
平成 5 年11月25日 発 行

編 集 室 蘭 工 業 大 学
発 行

印 刷 (有)日光印刷

室蘭市母恋北町1丁目6番3号
TEL (代) 22-8308